
朱に染まりて

兼高由季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朱に染まりて

【Nコード】

N3683C

【作者名】

兼高由季

【あらすじ】

新撰組最年少幹部の一人、さきがけ「魁先生」こと藤堂平助の恋と青春を描きます。

出会い1

京の町は、沈み行く太陽が放つ、その日最後の輝きに包まれていた。闇に支配される直前の刹那の時。

四条大橋の下をゆつたりと流れる鴨川も、橋の上を行き来する人々に背を向けて夕景を眺めている青年の横顔も、ほんのりと朱に染まあけっている。

行き交う女たちが、青年の視線の先を見定めようとして、次々と振り返るのも無理もない。

元結で束ねただけの総髪をさらさらと風になびかせている青年は、こざっぱりとした身なりとは裏腹な、華やかな美貌の持ち主だった。

婉然と微笑めば、女も男も頬を染めるだろう。

紅をひいたように艶やかな唇は、抜けるように白い肌をひきたたせ、ほっそりとした身体や上品な容貌とあいまって、不思議な色気をたたえている。

もつとも、そんな言葉を直接本人に向かって口にすれば、その場で首が飛びかねない。

青年は生粋の江戸っ子で、都人たちの言葉を借りれば、田舎者の東国武士。

さらには自他共に認める剣豪で、泣く子も黙る新撰組の一員である。名を藤堂平助という。

弘化元年生まれで二十一歳の彼は、斉藤一、沖田総司と並ぶ、最年少の新選組幹部。

江戸三大道場の一つである玄武館で北辰一刀流を修めた上に学もある。

スツと背筋を伸ばして歩く姿には、えも言われぬ気品があつて、三十二万三千石の大大名、津藩藩主、藤堂和泉守のご落胤らくいんなどと騒がれているのも、あながち嘘ではなさそうだ。

「すっかり秋だ。早いものだな」

涼やかな声には、少なからぬ感慨が含まれていた。

京都へ来てから一年半。

その間に何があつたかを眉間の刀傷が語っている。

横から見れば目立たなくても、正面から見ればはつきりとわかる三日月型の傷。

今はもう痛みも消えたその傷を、藤堂は指先でなぞってみた。

引きつった皮膚の感触が一つ記憶を蘇らせる。

生きているのが不思議なぐらいだ。

あれは、そう、今からちようと三月前。

祇園祭の山鉾巡行を翌々日に控えた蒸し暑い夜のことだった。

記憶は凄惨な拷問から始まっている。

木屋町通りで薪炭商を営む桝屋喜右衛門は、実の名を古高俊太郎といい、洛中を騒がす倒幕派の一味だった。

新撰組が桝屋に踏み込んだ時、古高は証拠となる書類を燃やしている所だった。

その時の落ち着き払った態度は、屯所に連行された後も変わらなかったが、頑として口を割らない相手に業をにやした副長の土方歳三がみずから拷問役を買って出た。

さんざんに打ち据えられ、顔の形もわからなくなった古高を、土方は天井から逆さに吊るし、足の裏に五寸釘を刺して百目ひゃくめうめく蠟燭を立てた。

ゆらゆらと揺れる炎の下から熱い蟬が流れ出し、じわじわと肌を焼いていく。

土蔵から漏れるうめき声を聞きながら、藤堂は目を閉じていた。

こついう陰湿なやり方は、背筋が寒くなるほど嫌いだが、古高が苦痛に耐えかねて漏らした計画は、それ以上にぞつとするものだった。

六月二十二日前後の風の強い日を選んで、京都に潜伏している討幕派の浪士たちが、御所の風上に一斉に火を放つ。

火はたちまち燃え広がり、都は大混乱に陥るだろう。

その混乱に乗じて幕府方の要人を次々と襲撃し、さらには天皇をさらって長州に連れ去るというのだが……。

「勤王の志士を自認する連中が天皇をさらうとは許せねえ。長州藩主は幕府を倒して自分が將軍になるつもりなんじゃねえか？」

饒舌な原田左之助の言葉も、冗談には聞こえなかった。

連中は天皇のことを「玉」と呼んでいる。

玉を手中にすれば、京都の政権は思いのままだ。

土方の対応は迅速だった。

会津藩邸に応援を求める使者を走らせると同時に、出勤可能な隊士を二つに分け、藤堂平助、沖田総司以下七名を局長の近藤勇に預け、自分は斎藤一ら二十二名を率いて市中探索を開始した。

不逞浪士たちが潜伏している可能性のある場所は、祇園界隈の茶屋や旅籠を中心^{はたこ}に約二十箇所。それら全てをしらみつぶしに探しているのだが、隊士たちの焦りをよそに、夜はどんどん更けていく。

左手には高瀬川。

右手に連なる材木問屋の家並が途切れると、三条通りが目の前に見

えてくる。

聞えてくるものと言えば、川のせせらぎと、川風に揺れる柳の葉音ぐらい。

通りにひしめく旅宿は、漆黒の闇に沈み込んだまま、ただただ眠りをむさぼっている。

「暑いなあ、京都の夏は蒸し暑くてかなわん」
(全くだ)

誰かの呟きに心の中だけで同意した時、先頭に行く近藤の手がずっと後方に振り下ろされた。

従う隊士たちが一斉に身構える。

誰もが食い入るように前を見た。

軒を並べる旅宿の造りはどれも似通っていて、ぱっと見ただけでは見分けがつかない。

けれどもその中に一つだけ、灯りが漏れている建物があった。

「池田屋ですね。昨年八月の政変までは長州藩の定宿でしたが……」
沖田の声をすぐそばで聞きながら、藤堂はかつて踏み込んだことのある池田屋の間取りを思い浮かべていた。

浪士たちが潜んでいるとしたら二階の奥の八帖間だろう。

襖を外してしまえば二十帖程度の大広間になるし、裏庭に出て堀を乗り越えれば、高瀬川の舟入に出ることができる。

「土方隊を呼びに行きますか」

「いや、我々だけでやる」

近藤の言葉に隊士たちが顔をひきつらせたのがわかったが、藤堂は無言でうなずいた。

合流地点は初めから三条通と決めてある。

遅かれ早かれ土方隊はここに来るのだから、わざわざ迎えに行くこ

とはない。

近藤隊は全部で十名。

表口に三名、そして裏口に三名を貼り付けると、四名しか残らない。その四名で池田屋に踏み込ことになるのだが、その人選は近藤の目配せ一つで簡単に済んだ。

もちろんその中には、北辰一刀流の使い手である藤堂平助も含まれている。

出会い2

よほど恐ろしかったのだろう。

入口に仁王立ちする完全武装の「壬生狼」の親玉を前にして、池田屋の主人は土間にぺたりと尻餅をついた。

それでも次の瞬間にははっと我に返り、背後の階段を振り仰ぐようにして、気丈にも声を張り上げた。

「皆様、旅客調べでございます！」

危険を知らせるその声が、浪士たちの耳に届いたかどうかはわからない。

主人を押しつけた近藤が疾風のように階段を駆け上がり、沖田が羽織を翻してそれに続く。

残る永倉新八と藤堂は無言で軽くうなずき合ってから、それぞれの場所に陣取った。

パァーンと襖が開く小気味良い音に続いて、悲鳴にも似た叫び声があがった。

不意を突かれた浪士たちが、数少ない逃げ場に殺到する。

足音の数は予想していたよりもはるかに多い。

二十人、いや、三十人はいるだろう。

柱の影にすばやく身を寄せた。

目の前は調理場と客室を仕切る三帖ほどの広さの中庭。

連中にとって最も逃げおおせる望みが高いのは、裏庭に飛び降りることだが、近藤、沖田のいずれかが、それを阻んでいるはずだ。

案の定、連中の多くが争うように手すりを乗り越え、次々と中庭に下りてきた。

その様子が、大型の吊り行灯にくっきりと浮かび上がる。

（影絵のようだ）

頭のどこかでぼんやりと思った時、すでに身体は動いていた。

「平助、抜かるなよ、よそ見なんぞしてたら、やられちまうぜ！」
炊事場の方から、永倉の大声が聞こえてきた。

「永倉さんこそ！」

同じように大声で返しながらも、血に濡れた刀を袈裟懸けに振り下ろす。

断末魔の悲鳴とともに、新たな血がしぶき、襖に点々と赤い花が咲く。

二階に駆け上がったはずの近藤の声が、裏庭の方から聞こえてきた。
「斬れ、斬れ」という掛け声が、いつの間にか、「捕縛せよ」に変わっている。

当初は多勢に無勢で余裕がなかったが、土方隊の到着で形勢逆転したらしい。

「遅いよ、みんな斬っちゃった」

口にした途端、忘れていた暑さが蘇ってきた。

着物の下に鎖帷子まで着込んでいるものだから、全身にびっしりと汗をかいている。

しんと静まり返った中、緩んだ鉢金を締めなおそうと額に手をかけた時、背後でコトリと音がした。

鉢金を掴んでいたせいで、刀を抜くのが一瞬だけ遅れた。

逃げ場を失い、物陰に潜んでいたのだろう。

咄嗟に振り返った時、狂ったように突進してくる男と目が合った。

「平助！」

悲痛に満ちた永倉の声が耳朶を打つ。

鋭い痛みが額に走り、とろりとした生温かいものが顔面を塗らした。真つ赤に染まった視界の中、狂気をはらんだ笑みと共に男は刀を振りかぶったが、そのままの姿勢で動かなくなった。

がくりとくず折れた敵の背後に立っていたのは、永倉だった。

全身におびただしい返り血を浴びている。

握り締めた刀は、奇妙な形に曲がっていた。

「このばか、何やってんだ！ お前は詰めが甘すぎる！ いいか、ここは戦場なんだぞ、最後の最後まで気を抜くんじゃない！」

乱暴に胸倉をつかまれ、さらには耳元でがなりたてられて、思わず苦笑が漏れた時、全身の力が抜け落ちた。

「お、おい、どうした？ 死ぬな、絶対に死ぬなよ！」

「……永倉さん」

相手の名を呼んでから、唇だけで「ありがとう」と礼を言った。

なおも永倉の言葉は続いていたが、混濁し始めた意識の中で、その意味を理解することはできなかった。

出会い3

「おつ、魁先生、気がついたか」

目を開けると、にやりと片頬で笑う原田左之助の上に見慣れた天井が広がっていた。

「魁先生って？」

痛みに顔をしかめながら訊ねると、「知らないのか？」とわざとらしく驚いてみせてから、ついさつき小耳に挟んだという隊士たちの話を披露してくれた。

不貞浪士の潜伏先を急襲する時など、危険な場所に最初に取り込む者を、新撰組では「死に番」と呼んでいる。

死に番は、平隊士間での当番制となっているが、そこに藤堂がいる時は、隊長である藤堂自身が真っ先に敵地へ踏み込んでいくものだから、「死に番」は意味をなさなくなる。

「だからお前は魁先生なんだそうだ。心意気は結構だが、隊長がまっさきに死んじまったら他の隊士はどうなる？これを機会にもっと自重しろ。死にたいわけじゃないんだろ？」

いつになく真面目な顔で諭されて、藤堂は逃げるように目を逸らした。

別に死にたいわけじゃない。

だが、自分より弱い者を盾にして進むのは絶対にいやだ。

「ま、俺はお前のそんな所が気に入っちゃあ、いるんだけどよ」

藤堂の心の声が届いたかのように呟いて、原田はすっと立ち上がる。そのまま出て行くのかと思いきや、襖を後ろ手で閉める直前で振り返り、意味深な笑みを向けてきた。

「きれいな顔に傷がついちまったな、武田観柳斎が嘆いてたぜ」
「武田だって!？」

局中でも有名な男色家の名を持ち出され、がばつと上半身を起こしかけた藤堂は、額に走る激痛にうめき声をあげた。

ようやく体勢を立て直した時には、原田の姿は視界から消えていた。廊下を去っていく上機嫌の笑い声を聞きながら、藤堂はがっくりと脱力した。

伊予松山藩脱藩の原田は、きりつとした眉の下、鋭い切れ長の目が印象的な美丈夫だ。

背が高く、すらりと引きしまった体躯を持つこの男が得意の長槍を自在に操る姿は、男の藤堂が見てもほれぼれするほどなのに、なぜか男に懸想されるのは自分ばかりだ。

「男色なんて虫唾^{むしず}が走る」

これまでも男から恋文を受け取るたびに、その場で相手を殴り倒してきたが、男だらけの新撰組で藤堂に恋情を抱いている者は少ない。

（動けるようになったら、武田をぶちのめしてやる）

顔に似合わぬ物騒なことを心に誓い、天井をにらみつけたまでは良かったが、原田に無理やり飲まされた石田散薬の効き目ゆえか、それとも耐え難い激痛ゆえか、再び意識を手放してしまった。

藤堂が屯所で傷養生をしている間、試衛館以来の仲間たちが、入れ替わり立ち代り様子を見にやってきたが、局長の近藤も例外ではなかった。

それは、意識を取り戻して間もない頃のこと。
廊下を踏み抜きそうな勢いで誰かの足音が近づいてきたと思うと、
頬を紅潮させた近藤が部屋に飛び込んできた。

「藤堂君、喜べ！」

理由を聞き返す間もなく、いきなり手を握られた。

竹刀だこのあるごつごつした手が、心なしか震えている。

わけがわからず相手の顔を見返すと、細く吊りあがった目から、
大な涙がぼろりと落ちた。

事情を聞いて藤堂も驚いた。

池田屋での新撰組の働きが認められ、朝廷からはお褒め言葉を、
将軍家からは報奨金をたまわったというではないか。

「ついに我々も尽忠報国の士として世に認められたのだ」

近藤の手を無言でぎゅっと握り返した時、戦闘に参加していない山
南敬助の顔が目に見えた。

体調を崩していたという正当な理由はあるにせよ、華々しい活躍の
場にいなかったことで、山南の今後の立場は、さらに微妙なものに
なるに違いない。

だが、近藤自身はそんなことなど思いもよらないようで、無口な男
には珍しく、藤堂の働きを褒めちぎり、二十両もの大金を置いてい
った。

「へえ、局長がそんなことをねえ」

いつものように部屋に現れた原田は、藤堂の話聞きながら、興味
深そうに相槌を打った。

短気で癪癪持ちで、言葉より先に刀にものを言わせる剃刀のような
男だが、医者が往診に来るとふらりと現れ、包帯を巻きなおす様子

を神妙な面持ちで眺めている。

「向こう傷のおかげで、強そうに見えるぞ」

「強そうに見えようと、見えなかつと、俺は実際に強いんですから、この傷に恐れをなして、敵が逃げ出したりしないことを祈りますよ」

慰めとも、からかいともつかない言葉に、強気の冗談で応じると、原田は楽しそうに破顔した。

藤堂より四つ上、永倉より一つ下の二十五歳。

年上なのに妙に気が合い、気の置けない仲間の一人だ。

襖を開けっ放しにして、試衛館時代の話をしていると、たまたま庭を通りがかった隊士が、なぜか頬を赤らめて行き過ぎる。

「そついやあ、俺とお前が念友だつて噂が流れているそうだぜ」

その一言で、藤堂の顔から笑みが消える。

噂を流している不屈き者の名を訊ねると、原田はだめだという代わりに、右掌てのひらを、ひらひらと目の前で振つてみせた。

「隊士の数が全然足りないんだ。お前に教えると、動ける者も動けなくなつちまう。まあ、もう少し待つんだな」

「もう少しつて、どういう意味です」

ますます不機嫌になつた藤堂だが、秋になったら江戸で隊士募集をするのだと聞かされて、思わず身を乗り出した。

「池田屋の一件で、武士はやっぱり東国に限るということに……お、おい、落ち着け、どこへ行く？」

東国人ではない原田はおもしろくなさそうに口を開いたが、布団から跳ね起きた藤堂を見て、目をむいた。

江戸へ行くのだと聞かされて、原田は思わず苦笑した。

「冗談だろ？」

「本気です」

痛みに顔をしかめながらも、藤堂は決然と言い放つ。

「隊士募集なら心当たりがあります。深川佐賀町に北辰一刀流道場を開いている伊東大蔵がいい。あの人なら、剣術も学問もできるし、人望もある。俺、一足先に江戸へ入って、伊東さんと話をつけて来ます」

「ちょ、ちょっと待った！」

今にも駆け出しそうな相手を、原田は全身で引き止めた。

「ものには順序つてもんがあるんだぜ、行くのはいい、行くのはいいが、せめて傷が治ってからに……」

「もちろん、そのつもりですよ」

けろりと応えた藤堂に、局長の許可を取りに行くから手を離して欲しいと頼まれ、原田は藤堂を押さえ込んだまま、へなへなとその場にしゃがみこんだ。

出会い4

「原田さんは、俺が江戸に行きたがっていることを、なぜ局長に話してくれたのだろう」

藤堂は四条大橋の欄干にもたれて呟いた。

伊東大蔵について説明すれば説明するほど原田は複雑な顔をした。

「そりゃあ、俺だって、殿様気分浸っている最近の局長や、その裏で糸を引いている副長のやり方には、いささか辟易しちゃいるが……」

声を潜め、そう前置きした上で、ずばりと核心に触れてきた。

「その伊東って男は新撰組に波風を立てるぜ。北辰一刀流の道場主なんざ、考えてみりゃあ、反対勢力みたいなもんだ。お前と山南さんまであっちに付いたら、一体どんなことになるか……」

原田の言うことにも一理ある。

だが、このまま引き下がるわけにはいかなかった。

山南と土方の関係が、この頃、目に見えて悪化してきている。

山南には人望があり、口にするのは常に正論だ。

それが土方は気に食わない。

仙台藩を脱藩したという山南は、北辰一刀流免許皆伝の持ち主であるにも関わらず、物静かな学者肌の男である。

肉親のいない藤堂にとって、強く、優しく、面倒見の良い兄弟子は、父のような存在だった。

「原田さん、お願いです、山南さんのためにも力を貸して下さい！」

原田の眉間にシワが寄る。

重い沈黙の後、ようやく搾り出された声は、原田らしくない陰鬱なものだった。

「伊東大蔵が入隊することで、本当に状況が良くなると思っているのか」

明らかに否定的な意味合いを含んだその言葉に、藤堂は強くうなずいた。

「伊東さんと山南さんは盟友だから、伊東さんが新選組に入ってくれたら、力関係も変わってくるはずです。このままじゃあ山南さんは排除されてしまう。俺は山南さんを助けたい。どんなことになっても、あの人を……」

ぼんぽんと軽く肩を叩かれて、思わず言葉を飲み込んだ。

「お前は本当に苦労人だなあ」

俯いたまま、ぎゅっとこぶしを握り締めていると、原田はしみじみと呟いて、そのまま部屋を出て行ってしまった。

翌日、局長が部屋に現れた。

「原田君から聞いたよ。伊東大蔵という御仁を口説きに行きたいそうだね」

上機嫌で伊東のことを聞いてくる近藤を前にして、藤堂は複雑な気持ちだった。

隊士募集のための帰東についても、原田の骨折りのおかげで、あっさりと許可がおりていた。

それなのに、なぜか素直に喜ぶことができない。

頭の中では、部屋を出る直前に見せた少し悲しげな原田の微笑が、いつまでもぐるぐると回っていた。

「江戸か……」

嵐山の稜線が鮮やかな夕映えの中にくつきりと浮かび上がっている。藤堂の心に呼応するように、欄干に止まっていた赤とんぼが東の空へと吸い込まれていった。

「この景色ともしばらくお別れだな」

上洛する將軍を警護するために、急ぎよ募集された浪士隊の一員として、京都に足を踏み入れたのは昨年二月のことだから、実に一年半ぶりだ。

久々の帰郷が嬉しくないわけではないが、素直に喜んでいられる状況ではなかった。

黒船来航以来、世の中は揺れに揺れている。

おおかたの意向を裏切って幕府が国を開いてしまつてから、幕府を倒して天皇中心の国家を作り、異人をことごとく討ち払つてしまえと主張する連中が、雨後の竹の子のように出始めた。

中でも天皇のお膝元である京都には「勤王の志士」を名乗る激派が終結し、「天誅」の名のもとに、幕府方の人間を一人また一人と血祭りにあげている。

浪士組結成の立役者である清河八郎も、蓋を開ければ勤王の志士の一人だった。

幕府を動かして浪士組を結成させておきながら、上洛した途端、朝廷のために働きたいと言い出して、幕臣たちを愕然とさせた。

朝廷は清河と浪士組を追い払うために帰東命令を出したが、近藤勇ら一部の者たちはそのまま京都に留まった。

幕府からもらった支度金も尽き、食つや食わずになつていたところに手を差し伸べてくれたのが、幕府から京都守護職を任されていた

会津藩主の松平容保だ。

池田屋の一件で新選組の名は洛中に轟いたが、内部的な引き締めは日に日に厳しくなっていく。

局中法度きょちゅうぽうどが作られ、それに違反する者はことごとく切腹。

もちろん幹部とて例外ではなく、初代局長の新見錦までもが、隊規違反で腹を切らされてしまった。

新選組は、近藤、土方の意のままに動く殺人集団として整えられつつあり、二人のやり方にたてつく者は、確実に肅正されていく。

（俺は一体、何をやっているのだろうか？）

藤堂は心の中で自らに問いかけた。

武士に憧れた。

理想に燃えていた。

金も欲しかった。

藤堂和泉守の御落胤ごらくいんなどと言われて育つても、それを証明するものは何もない。

母一人、子一人でさんざん苦勞をした拳句、火事で焼け出され孤児となり、近所の道場に預けられた。

自分が何者であるかを、自分自身で証明するために、ひたすら稽古を重ね学問に取り組む日々だった。

今は晴れて武士となり、金にも困ることはない。

だが、しかし……。

京都へ来た目的は、幕府の犬などと蔑まれながら、近藤、土方の命令に従い、死ぬまで人を斬り続けることなんかじゃ、なかったはずだ。

斬られて死ぬか、隊規違反で死ぬか、目の前に二つしか道がないのなら、自分で第三の道を作るしかない。

（俺自身のためにも、そして、山南さんのためにも……）

良かれと思ってした意見は何一つ受け入れられず、気がつけば、名ばかりの閑職に追いやられ、土方に対する怒りを静かに燃やし続けている山南を思い、藤堂は唇をかみ締めた。
その時である。

「おい、誰かそいつをつかまえてくれ！」
いきなり現実に取り戻された藤堂は、声のする方にすばやく視線を走らせた。

追われているのは、懸命にこちらに駆けてくる女の子。
追っているのは、腰に大小を差した、大柄で人相の悪い五人の男たち。

状況を一瞬で把握し、前に足を踏み出した時には、少女の腕をつかんでいた。

「こつちへ！」

よろめいた身体を軽々と引き寄せ、恐怖にはりつめた瞳に優しく微笑みかけてから、くると背後にかばい込む。

再び顔を上げた時、藤堂のまとう気ががらりと変化した。

「大の男が寄り集まって、子供相手に何をやってる？ 恥ずかしくないのか？ 腰の大小が泣いてるぜ！」

美しい目が剣呑に細められ、容赦なく相手を睨みすぎる。
胸のすく啖呵に野次馬たちから拍手があがり、浪士たちの顔色はど

す黒く変化した。

「何だと、てめえ！」

「若造のくせに生意気な！」

口では色々なことを言うくせに、互いの顔がはつきり見える位置につつたまま、男たちは動こうとしない。

それを見つめる藤堂のきれいな面には、相手をおもて威圧するような不敵な笑みが浮かんでいた。

「女みたいな顔をした優男じゃないか、こいつも一緒に売り飛ばそうぜ！」

自らを鼓舞するつもりだったのか、考えなしの一言に、藤堂の片眉がぴくりと持ち上がる。

「へえ」という感心したような声を吐き出した時には、右手の親指が刀の鯉口を切っていた。

「ま、待て、ちょっと待て！」

首領格と思われる頬に傷のある男が、あわてて前に進み出た。

「その子は祇園島村屋の芸妓だった芳野という女の妹だ。芳野が死にしまったんで、これからはそいつに働いてもらう。逃げたところで身寄りなどないし、金だって一文も持っちゃあいない。さあ、わかっただろ。これは人助けなんだ。とにかくそいつを……」

「ふざけるな！」

ちらりと背後の少女を見て、藤堂は声を張り上げた。

「この子を見ろよ、まだ子供じゃないか、姉の代りに遊郭で働けなんて、よく言えたものだ。食い詰め浪人が廓の用心棒になるのはよくあることだ。だが、性根まで腐っちまったらおしまいだ」

頑として少女のそば離れようとなしない相手を前にして、男の顔が複雑に歪む。

遊郭で雇われているだけに、そこそこ腕は立つのだろう。

にわかに訪れた静寂の中、相手が彼^{ひが}我の力量の差を見抜こうとしているのが、手に取るように伝わってきた。

一対一なら、どちらが勝つかは明白だ。

だが、多勢に無勢の上、少女の存在は足手まといと映るはず。

自分が私服であることを、ほんの少しだけ後悔した。

思った通り、こちらの腕を過小評価したらしい男たちは、一斉に刀を抜きつれた。

出会い5

藤堂は自分の背中と橋の欄干の間に少女を挟み込むようにして立っていた。

「いいか、俺が合図したら八坂神社近くの祇園会所まで走るんだ。走り出したら後ろを見るな。とにかく全力で走り抜け」

前を向いたまま少女だけに聞こえるように小声で告げると、背後でうなずく気配がした。

その間も獲物を襲う猛獣のように、男たちはじりじりと迫ってくる。静かに間合いをはかっていた藤堂が、ドンと派手な音をたてて、相手を威嚇するように左足を踏み出した。

「走れ！」

藤堂の声に抜き打ちで切られた男の絶叫が重なり、少女ははじかれたように駆け出した。

その行く手をはばもうと伸ばされた腕が、返す刀でぱさり切られて橋の上に転がった。

腕を失った男の胃の腑を絞るような悲鳴が、血なまぐさい空気を震わせる。

誰もが恐慌をきたして動きを止めた中、藤堂だけはすばやく体勢を立て直し、残る男たちに向き直った。

「おい、お前」

指差す先に、頬に刀傷のある男が立っていた。

「こいつらの中で一番強いくせに、なんで後ろにいるんだよ」

怒気を含んだ問いかけに、答える言葉は返ってこない。

蒼白になった男と、腕を切られてのた打ち回る男を残し、残る二人は脱兎のように逃げ出した。

（逃げ足の速いことで……）

こいつらが新撰組隊士なら、残らず士道不覚悟で切腹だ。心の中でひとりごちながら、藤堂は完全に戦意を失った男ののど元に、血に濡れた刀を突きつけた。

ヒッと悲鳴に近い声をあげて、男が上半身をのけぞらす。

その無様な姿に、半ば呆れ半ば腹を立てながら、思い切り腹を蹴飛ばした。

「お前なんぞ斬る気にもならねえ。怪我人を連れてさっさと消えちまえ！」

蹴られて尻餅をついた男は、あわてふためいて起き上がり、仲間を引きずるようにして姿を消した。

大勢いた見物人も、戦闘が始まったと同時に、クモの子を散らしたようにいなくなっていた。

後に残ったのは、半身に返り血を浴びて佇む藤堂の他には、血の海に横たわる死体が一つと腕が一本。

やれやれとため息をつき、刀を納めた藤堂は、そのまま橋を渡り始めた。

死体を放置しておくわけにもいかず、役所に届け出るつもりだったのだが、橋の終わりまで来た所で驚いたように足を止めた。

「そんな所へいたのか、どうして逃げなかったんだ!？」

不安そうに見つめられ、藤堂は思わず息を飲んだ。

年の頃は十一、二といったところか。

あらためて見ると、驚くほどきれいな少女だった。

抜けるように白い肌。

ほっそりとした手足。

頬と小さな唇は咲き初めの紅梅のようにほんのりと色づいて、触れればさぞかし柔らかだろう。

まばたきするも忘れて見つめていると、長いまつげに囲まれた大きな瞳に、ぷつくりと涙が浮かび上がってきた。

「あ！」とわめいた藤堂は、そのまま背後に飛びすさった。

女の子の世話など焼いたことがないものだから、こんな時どうすれば良いかわからない。

右を見て、左を見て、助け舟を出してくれそうな人が周囲にいないことを確認し、しどろもどろになりながらも、恐々となだめにかかった。

「ご、ごめん、責めているわけじゃないんだ。ほ、ほら、危ないだろ、それに人が斬られる所を子供に見せるなんて……あの……えつと……」

話を聞いているのか、いないのか、ぼろぼろと泣きながら、少女はなおもこちらを見上げてくる。

すっかり逃げ腰になった藤堂だが、相手が足から血を流しているのに気がついた時の反応は早かった。

「あいつらにやられたのか！」

一声そう叫ぶなり、すつとその場に膝を付き、着ている着物の袖を引き裂いて傷をしばるまでの手際の鮮やかさは、医者だって目を見張るだろう。

「痛いだろ？痛いよな。だが、心配は無用だぞ。すごい名医がいるんだ。すぐ近くだから連れてってやるよ」

安心させるような笑みを向けると、少女は困惑したように濡れた目を瞬いた。

応急処置を終えた藤堂は、当然のように少女に背を向ける。

「ほら、おぶされ!」

勢いよく言ったまでは良かったが、相手はじっと佇んだまま動こうとしない。

怪訝な面持ちで首を傾げた藤堂は、何気なく自分の着ているものを見てぎょつとした。

怯えるのは当然だ。

手も、着物も、返り血でべつとりと濡れている。

「ごめん……俺……」

俯いたまま小さな声で謝ると、少女は急いで首を横に振り、ためらいがちに近づいてきた。

小さな手がそつと肩にのせられる。

背中に預けられた体重は驚くほどに軽い。

何だか不思議な気分だった。

「俺の名前は藤堂平助」

相手の名を訊ねると、「あやの」という言葉が返ってきた。

「きれいな名前だ」

それに、鈴を振ったようなきれいな声だ。

我知らず微笑みながら、藤堂は少女を背負って今来た道を戻り始めた。

たった今、自分の傷を看てもらった医者の中へ連れて行くつもりだった。

「目を閉じていろ」

それでも鼻につく血の匂い。

橋の上に転がっている死体からは目をそらせても、自分の身体に染み込んだ血の匂いが消えることはないだろう。

それでもはるか頭上には、きれいな一番星が光っていた。

隊を脱するを1

八坂神社からほど近い桜小路通りに面した診療所では、狭い庭に咲く撫子の花が行く夏を惜しむかのように風に揺れていた。

「綾野、いい子にしていたか？うまい団子を買って来てやったぞ」奥の座敷に通された藤堂はそのまま真っすぐ縁側に出ると、庭で打ち水をしているほっそりとした後ろ姿に声をかけた。

飛び立つような勢いで振り返り、「藤堂様！」とはずんだ声をあげた綾野だが、にこにこしながら団子の包みを掲げている相手と目が合うと、頬を染めて俯いた。

「私、十五です。もう、子供じゃありません」

「そうだったけ？俺には二年前とちっとも変わっていないように見えるけど」

庭下駄をつっかけた藤堂が、からかうように相手の顔を覗きこむと初めて会った二年前、藤堂が自分のことを十歳ぐらいの子供だと思いついていたことを思い出し、綾野は耳まで赤くなった。

「私をいつまでも子供扱いするのは平助様だけです！」

柄杓ひしゃくを持つ手を振り上げると、藤堂は笑いながらも、あわててよけるふりをした。

柄杓の中に残っていた水が跳ね上がり、陽光をあびて小さな虹を作る。

それを見て、二人同時に歓声をあげる。

「いつまでそんな所で遊んでいるのです？綾野も子供だが、藤堂君、君だってそうやっている、似たり寄ったりに見えますぞ」

庭先でいつまでも笑い転げている二人に、玄斎があきれ顔で声をか

けてきて、騒ぎはようやくお開きになった。

「お前のせいだぞ」

照れ隠しに文句を言くと、「ごめんなさい」と殊勝に謝ってみせてから、綾野は藤堂に向き直り、この上なく優雅に礼をした。

「藤堂様、ようこそおいで下さいました。道具を片づけてまいりますので、座敷に上がっておくつろぎ下さい」

少し気取った口上の後、こぼれるような笑みを向けられて、藤堂は我知らず目を見張る。

努めて子供扱いしてはいるものの、実際には誰の目にも明らかなほど、二年という歳月が少女を変えていた。

納戸の方へ小走りに駆けて行く後姿を、気がつけば目で追っていた。後れ毛の散ったうなじも、着物からのぞく細い足首も、夏だというのに雪のように白い。

「まいったな」

呟いた言葉の意味にすら気付かない。

縁側に座り込んだ藤堂のかたわらを、爽やかな風が吹き抜けていった。

新撰組は我が世の春を迎えている。

西本願寺の北集会所に屯所を移して以降も隊士は増え続け、今では二百名近くにまでふくれあがっていた。

佐幕派の暗殺に血道をあげていた勤王の志士たちも、揃いの浅黄色の羽織を身に着けて市中を巡回する新選組に恐れをなしたように、洛中から姿を消した。

幕府や京都守護職の覚えも良く、資金もそれなりに潤沢で、八番隊長として幹部に名を連ねる藤堂も月々十五両もの手当てを受け取っ

ている。

急にふところが豊かになった隊士の多くは、祇園や島原などの花街にせつせと通い出し、局長をはじめとする幹部の中には、遊女を身受けて妾宅をかまえる者も出始めた。

藤堂も、永倉や原田に連れられてしばしば遊郭で遊んだが、頭のどこかがいつも覚めていて、酒色にのめり込むことはできなかった。

隊から月々の手当が支給されると、真っ先に出かけていくのは玄斎の所だ。

綾野の顔を見るのが目的だが、藤堂自身はそのことに気付いていない。

拾ってきた少女の養育費を渡しに行くのだと自分に言い聞かせ、実際にそのつもりになっている。

だからこそ、金に困っているわけでもないのに手当が支給される日を心待ちにし、手当てを受け取るやいなや、急いで屯所を飛び出した。

「おや、早速、祇園でお楽しみかい？」

でかけようとする藤堂に、永倉と原田がにやにやしながら声を掛けてくる。

手当てを待ちかねたように祇園方面に出かけていくものだから、祇園の花街になじみの芸妓がいると思っっているようだ。

否定するのは簡単だが、事実を口にするのは気恥ずかしい。

仕方なく、片頬だけで笑ってみせた。

「君の気持ちは嬉しいが、いくら何でも二両は多すぎる。あの子をあずかっているのは、金が欲しいからではないのだよ」

綾野が薬を届けるために出かけてしまうと、玄斎はまたいつもの話題を持ち出した。

明らかに迷惑そうな相手から目を逸らし、藤堂は持参した煎餅に手を伸ばす。

もちろん頭の中ではわかっている。

今の藤堂にとつてはたいした額ではないのだが、一両あれば四人家族がひと月は楽に暮らせるわけだから、玄斎が困惑するのも無理はない。

「綾野は診療所の仕事もよく手伝ってくれるし、私もおかげで生きる張り合いが出た。妻子を亡くして以来、ずっと一人で暮らしてきたが、綾野さえ良ければこのまま養女にしようと思っている」

藤堂の手から煎餅のかけらがぼとりと落ちる。

綾野にとつてはこの上なく良いことだ。

思わず顔を上げて相手の顔を見ると、だめ押しのように金子の入った包みが押し戻された。

「この金は、君が命懸けで得たものなのだから、自分のために使いなさい」

「でも、俺は……」

続く言葉を飲み込んで、藤堂は軽くうなずいてみせた。

「じゃあ、そうさせてもらいます。ただ、自分のためと言われるのも、新選組にいる限り、食べるものにも住む所にも困らない。物見遊山をする暇もないし、できることと言えば、祇園か島原の遊女を身受けて妾宅を持つことぐらいですが……」

「お、おい、藤堂君！」

思ってもいないことを口にする、玄斎の表情が変化した。

本気で言っているのかと訊ねられ、藤堂はにこりと微笑んだ。

隊を脱するを2

「冗談ですよ。金の使い道といつても俺が思い付くのはその程度ですから、気にしないで下さい。残るようならその分は貯めておいて、いつの日か先生からだと言つて渡してやればいい」

「自分で渡せばいいじゃないか」

再び自分の目の前に戻つて来た金子を、玄斎は不満げに見下ろした。

「この金のことだつて、君は内緒にしておいてくれと言つが、どうして綾野に知らせてはいけなのかね？ 第一君は、綾野のことを……」

続く言葉を手で制し、藤堂は静かに目を伏せた。

湿っぽいのは性に合わない。

だから笑つて話せないことは、できれば口にしたくなかつたのだが……。

「これまでに何人もの新撰組隊士が死にました」

その一言だけで玄斎が小さく息を飲む気配がする。

藤堂はぎゅっとこぶしを握り込み、動揺する心を抑えつけた。

「俺だつていつ死ぬかわからない。妙な恩を着せて綾野をしばるのは可哀相だ。だから先生にお願いしたのです。金が目当ての連中じやだめだ。あなたは人を身分や貧富の差で区別したりはしない。俺が死んでもあの子を放り出したりはしないでしょ？」

脳裏には隊規違反で切腹させられた山南敬助の顔と、山南の墓に取りすがつて泣いていた明里あけさとの姿が浮かんでいた。

頂点までくれば、あとは下るだけなのだ。

新選組は傍目から見れば日の出の勢いだが、実際はそうではないことに藤堂はとつくに気付いている。

ずっと幕府寄りの姿勢をみせていた孝明天皇が、昨年末に崩御された。

今年の正月には、ずっと犬猿の中だった薩摩と長州が手を結んだ。長州征伐の失敗は、はからずも徳川幕府の弱体化を露呈する結果となり、討幕の気運はヒタヒタ全国に広まっている。

薩長が手を携えて討幕に立ち上がった時、それに呼応する藩はかなりの数にのぼるだろう。

幕府の犬と目されている新選組に明るい未来が開けるとはどうしても思えない。

「こんな話はもうやめましょう」

玄斎の目が赤く潤んでいるのに気がついて、藤堂は話を打ち切った。「隊務があるのでそろそろ失礼します」

これ以上ここにいれば、とんでもないことを口にしてしまいそうだ。そう思ったから、相手の顔を見ないまま立ち上がり、逃げるように背を向けた。

「藤堂君！」

我に返った玄斎が、すぐるように声をかけてくる。

背を向けたまましていると、強く腕をつかまれた。

「使いに出ている綾野も間もなく戻ってくるから、もう少し居てくれないか。こんなに早く君を帰してしまったら、私が綾野に怒られてしまう」

「綾野に？」

苦し紛れの言葉に、藤堂は一瞬目を見張り、それからぶつと吹き出

した。

自分がいない間に藤堂が帰ってしまったことを知れば、綾野は確かに大騒ぎするだろう。

見かけはすっかり娘らしくなくても、中身はまだまだ子供なのだ。

「月が変わったらまた来ますよ」

明るい声を残して遠ざかっていく背筋の伸びた後姿から目を離せずに、玄斎は複雑な思いでため息をついた。

初めて会ったのは、「池田屋の変」の夜だった。

蘭法医の看板を掲げる玄斎の元に顔を朱に染めて担ぎ込まれた藤堂の姿は、京の町人たちが恐れる「壬生の狼」そのもので、さすがに慄然としたものだ。

だからこそ、血を拭い取った後に現れた貴公子のような美しい顔は、玄斎を少なからず驚かせた。

そして今は、裏表のない素直で爽やかな青年のことが、実の息子のように可愛く思えてならない。

本当にこれで良いのだろうか。

本人は気付いていないのだろうか、凜とした背中が寂しげに見える。

「武士とは悲しいものだな」

ぼつりと漏らした言葉は、藤堂の耳には届かない。

返ってきたのは、いつの間にかすっかり秋めいてきた風の音だけだった。

隊を脱するを3

太鼓堂を横目に見ながら西本願寺の境内に入った時、後ろからいきなり腕が伸びてきた。

避けると同時に身構えた藤堂は、そこに原田左之助が立っているのを見て警戒を解いた。

「どうしたんですか」

「どうしただと!？」

吊り上った眉が、さらにきりりと持ち上がる。

「さんざん待たせた上に、何を脳天気なことを言っただ!」

つかみ損ねた腕をあらためてつかんだ原田は、小柄な藤堂を引きずるようにして、怒ったように歩き出した。

「ちよつ、ちよつと待つて。俺はこれから巡回が……」

「他の者に代ってもらった。届けは出してある」

「そんな勝手な!」

さらに文句を言おうとすると、ものすごい顔でにらまれた。

原田は気が短く、怒りっぱいが、わけもなくこんなことをするような男ではない。

藤堂は仕方なく、相手に従うことにした。

連れて行かれた先は、釜屋町にある永倉新八の休息所。

休息所とはいわゆる妾宅のことで、永倉はここに小常という芸妓を身受けして囲っていた。

格子戸を開けて中に入ると、藤堂もかつて何度か宴席で見たことのある美しい女が、武家風の地味な着物姿で出迎えてくれた。

「すまねえな。ちよつと、じゃまするぜ」

軽く声をかけた原田は、自分の家でもあるかのような、慣れた様子で上がりこむ。

軽く礼をしてそれに続くと、永倉は奥の間で酒を飲んでいた。

「つけられなかっただろうな？」

押し殺した声で訊ねられ、原田は音もなく襖を閉めた。

「大丈夫だ。伊東一派と違って、こいつはまだ疑われちゃいない」
何やら深刻そうな二人を前に佇んでいると、永倉が座れと目で合図した。

「伊東甲子太郎から離れる」

伊東甲子太郎とは、新撰組入隊と同時に改名した伊東大蔵のことだ。

「伊東は入隊した当時から尊皇攘夷を盛んに説いてまわっていた。それだけなら、どうということはないが、最近では薩摩や長州といった討幕派の連中と公然と付き合っているようだ。知らないはずはないが念のため言っておく。副長は甘くない。局長が伊東に好意的だから手を下さないでいるが、それもそろそろ限界だ。隊内に血の雨を降らせたくないやあ、伊東一派を何とかしろ。それが無理なら、おまえだけでもあいつらから離れる」

「なんだ、そんな事ですか」

「そんなことつて、お前……」

あっさりと受け流した藤堂は、目の前の銚子に手を伸ばした。その様子を、永倉も原田もただただ茫然と見つめている。

「俺には伊東さんの気持ちがよくわかる。今や新選組は崖っぷちだ。どうせ死ぬなら自分の信念のもとに死にたいと思うのは当然ではありませんか？」

淡々と話しながらも、手がかすかに震えている。

それに気付かれないように、静かに盃を干した藤堂は、敢えて笑顔を作ってみせた。

「お前、自分の言っていることの意味がわかっているのか？」

「もちろんわかってるつもりです。倒幕派をいくら斬ったところで時代の流れは止められない。馬関を襲った四国連合艦隊の話は聞いたでしょう？ わずか半日で長州藩の台場は壊滅したそうじゃないですか。今の体制で攘夷なんてどだい無理なんです。国内で争っているうちにこの国は滅びる。それを防ぐためには、新しい潮流に身を任せるしかない」

永倉と原田は顔を見合わせた。

二人の前でこんな話をするのは初めてだから、とまどっているに違いない。

「いつからそんなことを考えるようになったんだ？ 山南さんが切腹させられてからも、おまえは新撰組の幹部として、隊務に励んでいたじゃあないか」

永倉の言葉には説得するような響きがあったが、藤堂の決意を翻すことはできなかった。

それが仕事だと思ったから、意に染まぬこともやってきた。

だが、山南が死んだ今、新撰組に留まる理由などどこにもないのだ。

「副長がなぜ山南さんを処断したのか、俺にはどうしてもわからない。山南さんは脱走したんじゃない。書面や口頭で意見しても副長が耳を貸そうとしないから、今のやり方では隊士がついてこなくなることを身をもって示そうとしただけなんだ。それなのに、なぜ…」

…」

こみ上げてくる悲しみを藤堂は無理やり抑え込んだ。

母を亡くし、右も左もわからぬまま道場に引き取られた藤堂のことを、唯一氣にかけてくれたのが山南だった。

剣術も学問も山南が手ほどきしてくれた。

入門とは名ばかりの、瘦せて小柄な下働きの少年に稽古を付けてくれる大人など、他には一人もいなかった。

試衛館の食客になったのも、浪士組の一員として上洛したのも、新選組として京へ残ったのも、山南敬助がそうすることを望んだからだ。

山南の背中を追いかけていれば、それで良かった。

だが、山南は、もういない。

「隊規違反で切腹させられてもいいから脱走しようと思ったこともあったけど、それでは山南さんの死を無駄にすることになる。局中法度にふれることなく新選組から抜けることができるのなら、俺はいつでも伊東さんに従うつもりです」

「馬鹿野郎！」

原田の怒声がびりりと空気を振るわせた。

「伊東は土方に睨まれている。これまで土方に睨まれて命を長らえた隊士は一人もない。お前だって知っているはずだ！」

力ずくでも藤堂を翻心させるつもりで振り上げられた腕は、けれども永倉に制された。

「平助、お前が考えていることはよくわかった。確かに俺達は時代を逆行しようとかあがいているだけなのかも知れない。だが、脱藩して行き場のなかった俺や原田が、たとえ一時のものであれ、時代の寵児になれたのは新選組のおかげだ。ぐらつく幕府の屋台骨を何が何でも支えてやろうとまでは思わないが、会津公や試衛館時代の近

藤局長には恩がある。色々面白い思いもさせてもらった。だからこの先にあるものが何であっても、俺も原田も最後まで新選組に付き合うつもりだ」

それだけ一気に言ってから、永倉は藤堂に笑いかけた。さっきまでの厳しい表情は消え、瞳には優しい色が浮かぶ。

「今日の話は聞かなかったことにしてやる。山南さんの代りにはなれないが、俺たちだって、お前のことを弟のように思っているんだぜ。だがもうお前は、誰かの後をついていくだけの子供じゃないんだなあ。自分の生き方を自分で決めることができるようになれば一人前だ」

「新八……おまえ……」

そう言ったとき言葉をつまらせた原田の背を、永倉はいささか乱暴に抱き込んだ。

そんな二人を言葉もなく見つめていると、ちらりとこちらを見た永倉が困ったように微笑んだ。

「平助、お前もか、たった今、一人前だって、ほめてやったばかりなのに……」

空いている方の手が、今度はこちらに伸びてくる。

強引に引き寄せられ、原田の頭に額をぶつけられた弾みに、ぽとりと涙が膝の上に落ちた。

気がつくつと、原田と永倉にしがみついたまま、声を殺して泣いていた。

人前で泣くななんて、この上ない恥だと思っのに……。なだめるように時折背中に触れる手が優しく、藤堂は、いつまでも顔を上げることができなかった。

それから一月あまりの後、新撰組参謀の伊東甲子太郎は近藤に新選組を分離させて欲しいと願い出た。

伊東の主張は、隊を脱するのではなく、分離という形をとることで薩長両藩との親交を密にし、有力な情報を収集しやすくするという、いささか詭弁じみたものだった。

もめにもめた拳句、翌年の慶応二年三月に、伊東は局長の許可を得ることに成功した。

従う隊士は藤堂平助を含む十五名。

早咲きの桜に見送られながら、一行は新撰組屯所を後にした。

御陵衛士 1

清水寺の舞台から眼下に広がる景色を綾野は飽きることなく眺めている。

いつもは玄斎の妻が着ていたという地味な着物をもらって身につけているのに、今日は珊瑚色の娘らしい着物の袖をひらひらと風に揺らしている。

新緑を背に佇む姿は京人形のような。

そんなことをぼんやりと考えている自分に気がついて、藤堂は我知らず赤面した。

意識していないつもりなのに、目は勝手に綾野を追っていて、さつきから何だか落着かない。そのせいか、いつもは努めて避けている話題を、ついつうっかり持ち出してしまった。

「ごりようえいし？」

くるりと振り返った相手と、いきなり目と目がぶつかった。

「そう、御陵衛士。新しい屯所に移動したばかりだからまだ落着かないけど、今いる高台寺の月真院は診療所からも近いし、高台寺と言えば萩の名所としても有名だ。秋になって花が咲いたら玄斎先生と一緒に遊びにおいで」

楽しいことのように語ったが、綾野は表情を曇らせた。

鈴を張ったような大きな瞳には、不安の色が見え隠れしている。

「御陵衛士のお役目は孝明天皇の御陵をお守りすることだと聞きました」

「そんなこと誰に聞いたんだ？」

「薩摩の……お侍様」

言いにくそうに告げる綾野の顔を、藤堂は緊張した面持ちで見下ろした。

花街で働く女から、諸藩の藩士にいたるまで、玄斎の診療所には様々な患者がやってくる。

薩摩藩士が出入りしていても不思議はなかった。

「新選組を脱退した高台寺党なら上手く始末してくれるだろうって、ひそひそ声で話しているのを、偶然聞いてしまったんです。先生は診療所で聞いたことは人に言っではいけないとおっしゃるけど、高台寺党って御陵衛士のことでしょうか？ 難しいことはよくわからないけど、綾野は……綾野は、藤堂様が危険な目に会っただけは絶対にいやす！」

「薩摩藩の連中がそんなことを……」

軽くため息をついた藤堂は、新選組屯所のあるあたりに目をやった。

局中法度による切腹だけは何とか免れたものの、今の自分がこれまで以上に死と隣り合わせであることは自覚しているつもりだった。

近藤、土方は、意外なほどあっさりと分離を許したが、それはあくまでも表面上のことに過ぎない。

切腹する山南を冷ややかに見つめる土方歳三の顔が目には浮んだ。

ある者は目を背け、またある者は涙を流し、誰もが感情の高ぶりと必死に戦っている中、土方だけは顔色一つ変えずに切腹の一部始終を見つめ続けた。

その時、藤堂は、ぞっとする思いで確信した。

この男は、新選組を脱する者は、たとえそれが局長の近藤であったとしても、腹を切らせるに違いないと。

伊東とともに分離した者たちは、一騎当千の剣客ばかり。

恐らくは表だってではなく、別の手段をもって抹殺しようとするはずだ。

殺らなければ確実に殺られる。
だが、そんなことを綾野に言ったところで、一体何になるというだろう。

藤堂は意を決したように顔を上げ、今度はまっすぐに綾野を見つめた。

綾野も大きな瞳を潤ませて、ひたとこちらを見つめている。
いつからなのだろう。

こんな風に、ただ見ているだけで、息苦しいほどの愛しさと切なさを感じるようになったのは。

（死ぬものか……）

その細くたおやかな身体を思わず抱きしめそうになるのを抑えながら、藤堂は自分に言い聞かせた。

やけくそで敵にぶつかっていった昔とは違う。

今の藤堂には希望があった。

この戦いに勝つことができれば、その時は、その時こそは……。

「俺は簡単に死んだりはしない」

一言も聞き漏らすまいとでもするように、綾野は息を止めている。

「今だから言えるけど、新選組にいた頃の俺は、死ぬためだけに戦っていた。でもこれからは違う。これからの俺は生きるために戦う。なあに、こう見えても数え切れないほど修羅場をくぐってきたんだ。俺と戦って勝てるやつなんて、滅多にいないさ」

「でも、でも、藤堂様は強いけど、もっと強い人だっているはずで。いきなり大勢に斬りかかれるかもしれない。暗闇で待ち伏せ

されるかも知れない。藤堂様に何かあったら、私、私……」

自らの言葉に怯えたように、綾野はぐらりとよろめいて、咄嗟に手を伸ばした藤堂の胸に、すがりつくように飛び込んだ。

「藤堂様が死んだら綾野も死にます」

思いもよらぬ言葉だった。

二人が立っているのは、京洛屈指の名刹、清水寺の舞台。

周囲の視線を感じて藤堂はうろたえたが、うろたえた理由はそれだけではなかった。

どうして良いかわからぬまま、藤堂は綾野の頬に手を伸ばした。

「心配させて悪かった。でも、俺はもう新選組隊士じゃないんだ。いざとなったら敵に後ろを見せてでも生き抜いてやるよ」

涙を拭ってやってから、照れ隠しに微笑むと、綾野もようやく笑顔を見せた。

周囲の人々は半ばうつとり二人を眺め、その傍らを、足音を忍ばせて行き過ぎた。

あたかも一幅の絵のように、二人はいつまでも寄り添って、京の街を見下ろしていた。

音羽の滝のすぐそばにある茶店は、今日も参拝客で賑わっていた。

「おい、あれは平助じゃないか!？」

永倉が驚いた声をあげると、小常もつられて上を見た。

この日、非番の永倉新八は、小常を伴って安産祈願のために清水寺へ来ていた。

あと数ヶ月で永倉と小常の間に待望の第一子が生まれるのだ。

「目の覚めるような美形じゃないか。だがあれは花街の女じゃない

な。祇園の遊郭に通っているという噂は嘘だったようだ」

新選組を脱退したとは言え、藤堂は弟分のように思う気持ちは変わらない。

目を細めて二人を見てみると、小常が意外なことを口にした。

「あら、川上診療所の綾野ちゃんだわ」

「綾野って？」

「藤堂さんと一緒にいる娘さんの名前ですよ。祇園の芸妓だったというお姉さんが亡くなって、遠い親戚の玄斎先生に引取られたそうだけど、ほら、あんなにきれいな子でしょう？縁談話が次々と持ち込まれるのに、先生が片っ端から断ってしまうんですって。それって、藤堂さんがいるからだったのかしら？」

「おまえ、よく知ってるなあ」

水を得た魚のように生き生きと話し始めた相手を、半ば呆れて見つめると、小常は嫣然と微笑んだ。

御陵衛士2

「私だつてちよつと前までは島原で鳴らした芸妓ですよ。あの子の姉は祇園でも一、二の売れっ子だったから、病であっけなく死んでしまった時は、それはもう大変な騒ぎで……。その妹が診療所へ引取られたつていうので、わざわざ深草太夫と一緒に見に行つたんですから」

永倉は苦笑を浮かべたが、気になることが一つあつた。
深草太夫は局長の妾だ。

女たちの口を通じて、このことが局長の耳に入ったら、あの子に危険が及ぶかも知れない。

「今日見たことは誰にも言うんじやないぞ」
真顔になつて告げると、小常はぽんと胸を叩いてみせた。

「まかしておいて下さいな。花街の女は口が軽くちゃ務まらない。誰にも言うものですか」
さらにあれこれ言っているのをうわの空で聞きながら、永倉は藤堂のために自分が何をしてやれるかを考え始めた。

御陵衛士になつてからも藤堂たちの忙しさは変わらないどころか、これまで以上に忙しくなつたかも知れない。
当面の目標は同士を増やすことであり、御陵衛士たちはそれぞれのつてをたどつて諸国を巡り、遊説を行つた。

寸暇を惜しんで学問にも打ち込んだ。
幕府がフランスとさかに交易し、フランス式軍隊の増強に力を入れていたのに対し、薩摩や長州といった西国の雄藩は、英国との結

びつきを深めている。

伊東は薩摩藩を通じて英語の教本や火薬の調合などに関する書物を取り寄せ、時には専門家を招聘して勉強会を行うこともあった。

「あの、藤堂さん……」

月真院の庭石の1つに腰掛け、習ったばかりの英単語を暗記していると、三樹三郎が声をかけてきた。

三樹は伊東甲子太郎の弟で、年は藤堂よりも7つ上。

新選組時代は兄の威光で伍長に任命されていたが、剣の腕は平隊士よりも劣っていた。

そのせいか、新選組四天王の一人と言われた藤堂には一目置いており、まるで目上に対するような話し方をするのだが……。

手帳を手にしたまま顔をあげると、大真面目な面持ちで顔を覗きこんできた。

「加納さんたちと口論していたのですが、藤堂さんは右を下にして寝るのと、左を下にして寝るのと、どっちが良いと思われませんか？」

「は？」

「寝ていて刺客に襲われた時の話ですよ。刀を抱いて左を下にして寝ていた場合、何かあった時にはすばやく応戦できるものの、最初の一撃で右手をやられたら、もう戦いようがない。その点、右を下にしていれば、左手をやられても、まだまだ右手で応戦できる。とは言え、反撃が遅れるのは避けられない……」

「随分と……物騒な話ですね」

笑い出しそうになるのをこらえて言うと、相手は真剣な面持ちでうなずいた。

新選組を分離して以来、ひとときも刀を離せなくなったのは藤堂も同じである。

深夜の襲撃に備え、布団の中で刀を抱いて寝ているというのも嘘ではない。

（だが、右が下とか左が下とか、これはまた……）

自分以外の御陵衛士たちは、新選組の真の恐ろしさを知らないのだ。そのことをあらためて確認させられて、藤堂は少し憂鬱になった。

新選組初代局長に芹沢鴨という豪傑がいた。

神道無念流の免許皆伝で、剣術の腕は群を抜いていたが、酒乱の上、女癖が悪く、新選組に在籍していたわずか半年ほどの間に、平隊士を斬殺してその女を我が物にしようとしたり、借金を断ってきた商家の土蔵に大砲をぶち込んで燃やしたり、遊郭で暴れまわった上、勝手に営業停止を申しつけたり、数えあげればきりがないほどの乱暴狼藉を繰り返した末、とうとう近藤派の連中に暗殺されてしまった。

糸を引いたのは土方だった。

まずは、島原の一流料亭「角屋」で総揚げの大宴会を催し、腹心の隊士を総動員して芹沢の機嫌を取らせ、酒をどんどんすすめさせた。おだてられ、持ち上げられ、すっかり良い気分になった獲物が、酔って前後不覚になるまでに、それほど時間はかからなかった。酔ってふらふらになった芹沢を、芹沢の腹心である平間と平山に命じて屯所まで送らせた後も、その日の宴会は終わらなかった。

土方は夜遅くに何食わぬ顔で屯所に引き上げ、いったん自室へ落ち着いた後、沖田、山南、原田の三人を伴って前川邸を後にした。

通りを挟んだ斜め向いにある八木邸で、血生臭い暗殺劇が繰り広げられたのはその直後だったが、直接手を下した四名の他に局長の近藤を除くと、誰もこのことを知らなかった。

騒ぎを聞きつけた藤堂たちが八木邸に踏み込んだ時には、天井と言わず、襖と言わず、あたり一面血の海で、その中に、なますのように斬り刻まれた真っ裸の芹沢と、首と胴体が斬り離された平山、芹沢の愛妾お梅の死体が無残に転がっていた。

芹沢の死因は隠され、会津藩には病没と届けられた。

芹沢のために挙行された葬儀の席上で、近藤は長い弔辞を朗々と詠み上げた。

事の真相は山南から聞かされた。

葬儀に参列した山南の顔は真っ青だった。

思えばこの日を境に、山南は土方を毛嫌いするようになったのかも知れない。

「さあ、どうでしょう?」

三樹の生真面目そうな顔から目を逸らし、藤堂は考えるふりをした。

「俺は寝相が悪いので、寝る時にどっちを向いたところで、あまり意味がなさそうだ」

「寝相……ですか」

「ええ、まあ、そういうことです。俺の場合、どちらが下になっているかは寝相次第です」

下らぬ論争に巻き込まれるのはまっぴらだ。

手帳を懐につっこんだ藤堂は、爽やかな笑顔を残してその場を立ち去った。

誰をも魅了する笑顔は門を出ると同時に消えた。

（刀で斬りつけられてはじめて刺客に気付くようじゃ、どのみち助からない）

それが本当の答えである。

斬られた時の対応より、斬られる前にいかにして斬るかを考えなくては意味がない。

（伊東さんは甘すぎる）

自分の弁舌をもってことにあたれば、いかなる相手をも説得できると自負している。

全てを自分の物差しに当てはめて判断してしまうのは、天才、伊東甲子太郎の甘さであり、大きな弱点だ。

はけ口のない苛立ちを抑え込みながらひたすら歩いていくと、河原に出だ。

河原にどかりと腰を降ろした藤堂は、そのまま仰向けに寝転がった。

千切れ雲がゆつくりと流れていく。

「ぐうとないと……こんばんは」

藤堂はその雲に向かって、先ほど手帳に書き込んだ不思議な響きの言葉を、小さくつぶやいてみた。

「ぎふみい……私にくだされ」

「せんきゆう……ありがとう」

「あいらぶゆう……私はあなたが……」

好きですと口にすることができずに青天井を見つめていると、美しい少女の面影がぼんやりと浮かんできた。

「あいらぶゆう」

そつと真顔で告げてから、藤堂はくすりと笑って目を閉じた。

恋1

誰かが足音を忍ばせて近付いてくる。

瞬時に覚醒した藤堂は、そのまま寝たふりを続けながら、全身の神経を近づいてくる人の気配に集中させた。

（刺客につけられていたのだろうか）

背中を冷たい予感が駆け抜ける。

新選組であれば、一人で襲ってくることは、ありえない。

最低でも五・六人は物陰に潜んでいるはずだ。

（右を下にするのがいいか、左を下にするのがいいか、試しそこなうってしまったな）

三樹との会話が脳裏をよぎり、そんなことをちらりと考えた。

仰向けに寝転がっているというのは、この上なく不利な状況だが、最初の一人を倒せば何とかなるかも知れない。

間合いが二間までつまった所で、藤堂は身体を反転させ、着ていた羽織を剥ぎ取った。

黒縮緬の羽織がふわりと広がって宙を舞い、相手の視界を瞬時に奪う。

「うわっ！」という叫び声を合図に、すばやく起き上がり、地面を蹴って跳躍した。

その手には、立ち上がりざまに抜刀した、藤原長次が握られている。瞬きするほどの間にこれだけのことをやってのけたのもさすがだが、振り下ろした刀の切先を、相手の頭上わずか一寸というきわどい所でとめたのは、もはや神業に近いだろう。

「……原田さん」

気抜けしたまま名を呼ぶと、原田は刀を突きつけられたまま、ひきつった笑みを浮かべてみせた。

「だから言つたら、ばかな真似はよせつてさ、魁^{さきがけ}先生を相手にそんな冗談をやっていたら、命がいくつあつても足りないぜ」

背後の土手の上から永倉新八の大声が聞こえてきた。

「確かに八つつあんの言う通りだ。危うく真つ二つになる所だつた」
ぶつぶつ言っている相手に手を貸してやりながら、藤堂は相手の顔を覗き込んだ。

「俺をからかうために、わざわざここまで来たんですか。それとも二人して俺を斬りに来たんですか」

「何だと！」

切れ長の目が剣呑に細められ、不機嫌な声とともに、いきなり伸びてきた原田の腕が、藤堂の肩をがっしと掴んで引き寄せた。

「本気で斬るなら、こんなヘマをやらかすもんか！新八とぶらぶらしてたら、お前がのんきに寝ているのを見かけたんで、刺客に気をつけると教えに来てやつたんじゃねえか！」

「左之、気をつけるのはお前の方だぜ」

耳元で大声を出されて目を白黒していると、笑いながら近づいてきた永倉が、原田を藤堂から引き離してくれた。

「平助が俺を斬るわけない。刀を直前で止めることは計算の上だ」
「ふつ、死ぬまで言つてろ」

「そんなことより、男二人でこんな所をぶらぶらしていて、一体、何が楽しいんですか？」

たわいないかけあいを始めた二人の顔を見比べながら訊ねると、原田はにやりと笑ってみせた。

「そりゃあ楽しいさ。お前も来いよ」

「いや、俺は……」

断ろうとしたが無駄だった。

藤堂の羽織を奪い取ったまま、原田は早くも歩き出している。

「ちょ、ちよつと、原田さん、待って下さい！こんな所を新選組の誰かに見られたら大変なことに……」

「男三人で歩いていても、切腹にはならんよ」

すまして応えた永倉に、「さ、行こうぜ」と促され、藤堂は唇をかみしめた。

殺るか、殺られるか。

目の前の二人に、この二者択一を当てはめることなど、とてもできない。

「わかりました。こうなったら、地獄にだって付き合いますよ」

「誰が地獄なんて言った？ほらっ、あれさ」

原田はおどけたように前方を指さした。

指差す先に、祇園の花街を彩る燈火が、点々と浮かんでいる。

いつのまにかあたりは暮色に染まっていた。

三人は「島村屋」の屋号を掲げた茶屋の前で足をとめた。

通されたのは二階の座敷。

永倉は芸妓を呼ぶことはせず、一通り酒肴が運ばれた所で人払いをした。

「祇園で遊ぶつもりだったなんて、嘘ですね」

盃を置きながら訊ねると、永倉は眉間にシワを刻み込んだ。

「局長の指図ですか」

「違う、そんなんじゃないんだ」

いつもは冷静な永倉の瞳に、必死の色が浮かんでいた。

「今日は新選組の組長としてではなく、苦楽を共にしてきた仲間として、お前に忠告させてもらう。もう一刻の猶予もならねえ、今すぐ高台寺党を抜けて身を隠せ！」

伊東ともに新撰組を離れた斉藤一は、土方が放った間者であった。伊東たちの動きは斉藤を通じて逐一新選組に報告されており、高台寺党が薩摩藩と結びついていることは、すでに新選組幹部の間に知れ渡っている。

土方は、月真院の裏山に大砲を据えて砲撃し、さらには小銃隊を率いて夜襲をかけ、高台寺党を一気に抹殺すべしと主張している。

土方に反対しているのは、永倉、原田、そして局長の三人。

近藤は、隊を公然と抜けた高台寺党を許すことはできないが、藤堂だけは何とか助けたいと考えていた。

高台寺党が分離した直後に、新撰組は幕府の直参になった。

不動堂村に新しい屯所を建てて移ってから、隊士は増える一方で、今では二百五十名を超えている。

どう考えても、十五名対二百五十名では勝負にならない。

「詳しいことは言えないが、鬼副長がそろそろ本気を出してきたって言えば、わかるだろう？」

永倉の言葉に藤堂は静かにうなずいた。

「でも俺は、新選組を脱退して御陵衛士になったことは少しも後悔していないし、鬼副長がどう動こうが、仲間を見捨てて逃げる気はありません」

「何を言っている？お前は生きるために新選組を抜けたんじゃないのか？」

「俺は武士です。死を恐れることは……」

「いい加減にしろ！」

それまで黙っていた原田が腹に据えかねたように立ち上がった。

「さんざん心配させやがって！お前は何を考えてるいいだ！それほど死にたいなら、俺が今すぐたたつ斬ってやる！」

啖呵は切ったものの、刀は店に預けたままだ。

仁王立ちしたまま拳を強く握り締め、強い眼差しで藤堂をにらみつけた。

「俺達がどんな思いでお前が出て行くのを見送ったと思う？ お前は剣の腕も立つし、学もある。人望だつて……。それなのに、山南さんがいなくなってからは、死に場所を求めるように、危険な場所に身を投じるようになった。そんなお前を見ていられなかったから、違う人生を生きて欲しかったから……だから……」

「左之助、もういい」

いたわるように伸びてきた同僚の腕を、原田は弱々しく払いのけた。

「新八、俺はもう、どうしたらいいかわからない。俺達はいつを助けようと必死なのに、こいつは自分の足元なんか気にもしない。おい、平助、お前がいくら剣の達人でも、何十人もの相手を敵に回して戦うことはできないんだぞ。目を開けて足元を見る。自分が崖っぷちにいるのがわからないのか！？」

「ね、原田さん」

原田の話をじつと聴いていた藤堂は、ふわりと相手の名を口にした。繊細な美貌に浮かぶ微笑みに、原田は氣勢をそがれて目を伏せた。

「永倉さんの休息所へ行つた時のことは覚えていますよね？あの時も永倉さんと原田さんは危険をおかして俺に忠告してくれたのに、俺は聞こうとしなかった」

「もちろん覚えているさ。何を他人事みたいに？お前にとっては笑事なのか？」

原田の皮肉な笑みを受け止めたまま、藤堂はなおも言葉を紡ぐ。笑つたのは嬉しかったからだ。

新選組を脱退したことで、かつての仲間を敵に回してしまった。永倉と原田がこんな風に自分を心配してくれることが、今はただ、嬉しくてならない。

藤堂の予想外の反応に、原田も永倉も戸惑いを隠せない。

「二人とも、本当にありがとう」

心底嬉しそうな笑みを向けられては、怒りを持続させることは不可能だった。

藤堂の笑顔には男も女も魅了される。

もつとも藤堂自身は、そんなことには全く気付いていないのだが。

「今日のことは誰にも言わない。どうすればいいかをちゃんと考える。俺は逃げも隠れもしないけど、もちろん死にたいわけじゃない。そして、永倉さん、原田さんにも生きていて欲しい。何か方法があるはずだ。敵対する立場にありながら、こんなことというのはおかしいけど、俺はこの先何があっても、永倉さんと原田さんには、変わらないでいて欲しい」

「新選組と高台寺党が敵対しようが俺達には関係ない。何と云つても、長いつきあいだからな。新選組も大変な時だから、表立って波風を立てるわけにはいかないが、俺達もできるだけのことはしてみ

るさ」

永倉と藤堂は同時に立ち上がり、原田も合わせて三人で手を握り合い、互いの顔を見つめ合った。

だが、三人の男たちが目を潤ませて見つめ合っていたのは、ほんのわずかな時間にすぎない。

すぐに芝居じみた行為が恥ずかしくなり、誰からともなく大声で笑い出した。

恋2

「よし、とにかく今夜は飲もう！」

原田が明るい声をあげ、永倉が勢いよく手を叩くと、華やかに着飾った芸妓たちが流れ込んできて、座敷はたちまちにぎやかな手拍子と三味線の音に満たされた。

その、宴もたけなわの頃。

藤堂はふいに立ち上がり、通りに面した障子戸を開けてみた。

昼間とは打って変わった冷たい空気が、ほてった頬に心地よい。

狭い通りを隔てた真向かいに、よく似た造りの茶屋の窓が見えた。座敷の明かりが、宴会に興じる人々の姿を、影絵のように映し出している。

向こうの窓から見れば、こちらと同じように見えるのだろう。

人の一生は、一夜の夢のようなもの。

夢はいつ果てるのか。

その後は何が残るのか。

生と死、そして愛する人との狭間にあつて、藤堂の気持ちは激しく揺れ動いていた。

慶応三年十一月。

藤堂は川上診療所の座敷から、ぼんやりと庭を眺めていた。

外にはうっすらと雪が積もっている。

葉をもらいに来る者もなく、空から落ちてくる雪の音さえ聞こえてきそうな静謐な午後だ。

「先生はいつ帰ってくるのだろう」

「少し遠方に往診に行つてらっしゃるから、夕方頃になると思いま

すけど」

独り言のように呟くと、すぐに答えが返ってきた。
何気なく振り返った藤堂は、そのままの姿勢で固まった。

いつからそこにいたのだろうか？

大きな瞳。可憐な唇。白い肌……。

至近距離から穴の開くほど見つめられ、無意識にわずかにのけぞったが、ためらいもなく小さな手が伸びてきた。

ありえない展開に、理性がぐらぐらと揺れ始めた。

頬に触れた柔らかな手の感触に、びくりと身体が震えた時、間近に迫った唇が思いも寄らぬことを口にした。

「唇の色が真っ青。早く戸をお閉めにならないと、風邪をひいてしまいます」

えっ？と思って相手の顔を見た。

よく見れば、患者を診る医者顔になっている。

熱いお茶を満たした大ぶりの湯飲みを手渡され、藤堂は脱力したまま苦笑った。

「すぐに閉めるよ。ただ、撫子が……」

「撫子？」

「枯れてしまつて、淋しくなつたなつて、思っていたんだ」

撫子は亡くなつた母が好きな花だった。

花は藤堂が幼い頃に死んでしまつたし、一緒に暮らしていた頃のことあまり覚えてはいないけど、一緒に撫子の花を植えたことだけは、今でもぼんやりと覚えている。

「おかしいよな。この年になつて母親だなんて」

「いいえ、そんなこと……。私も撫子の花は大好き。可憐で、優し
げで、それでいてどこか凜とした所があつて……。きっと、藤堂様
のお母様も撫子のような方だったんですね」

まるでそこに誰かが立っているかのように、綾野は何もない庭を見
つめたまま、遠い目をして微笑んだ。

その横顔を見つめたまま記憶の糸をたどったが、どんなに思い出そ
うとしても、母の顔は浮かんでこない。

小さく吐息をついてから、藤堂はぽつりとつぶやいた。

「撫子みたいな人なら、もう一人知っているぞ」

「それは誰ですか？」

綾野は目を輝かせたが、藤堂は笑って答えない。

本人の前でその名を口にできるはずがない。

それなのに、綾野はだんだんムキになり、たわいない押し問答を繰
り返した末、藤堂に向かって手を振り上げた。

「意地悪！どうして教えてくれないんですか？」

こらえきれなくなつて、藤堂はぷつと吹き出した。

こういう所は、まだまだ子供だ。

すぐに手が出るあたりは、ひよつとすると自分の悪い影響かも知れ
ない。

「相変わらずおてんばだな。そんなことじゃあ、嫁のもらい手がな
くなるぞ」

笑いながら腕をつかむと、綾野は急におとなしくなり、悲しそうに
俯いた。

「そんなことないわ……。藤堂様なんて……」

長い沈黙の後、ようやく聞こえてきた声が涙に濡れている。

驚いて相手の顔を覗きこむと、潤んだ瞳とぶつかってしまった。

笑ったり、すねたり、怒ったりと、次々に変化する表情は、見てい

て飽きない。

けれども泣き顔だけは困りものだ。

「汁粉でも食いに行こうか」

すぐに機嫌をなおすと思ったのに、綾野は無言で首を横に振り、しがみつくように抱きついてきた。

「好きです」

思わず口を開いたが、言葉は何も出てこない。

軽いめまいを感じながら、腕の中の人を見下ろした。

「四条大橋の上で助けて頂いた時から、ずっと、ずっと、好きでした」

背中に回した腕に思わず力がこもりそうになるのをこらえながら、そつと肩を両手でつかみ、静かに自分から引き離れた。

「じよ、冗談だろ？ ほらっ、もう、子供じゃないんだから……そんな風にしがみつかれたら……」

「そうです。綾野はもう子供じゃありません」

きらきらと輝く瞳に、自分の顔が映っていた。

化粧もしていないのに綾野の肌は透けるように白い。

花びらのように可憐な唇。

やさしい稜線を描いた眉。

美しい鼻梁……。

その全てが愛しくて、触れたいと思うより先に身体が動いていた。

（俺はどうかしている）

柔らかな頬に触れた手が、初めて女性に触れた時のように緊張している。

気がつくと、長いまつげに誘われるまま、吸い込まれるように目を閉じていた。

「どうして……」

長い口付けの後、頬を伝う涙の意味を訊ねられ、ただ無言で微笑んだ。

自分は今、崖っぷちに立っている。

落ちる時は一人で落ちなくてはならない。

頭の中ではずっと警鐘が鳴り続けているというのに、心が勝手に暴走して、もうどうすることもできない。

「綾野、ごめん」

罪の重さに震えながら、藤堂はほっそりとした身体を抱きしめた。

伊東甲子太郎 1

高台寺月真院にいる伊東甲子太郎のもとに一通の書状が届いた。

差出人の名は近藤勇。

七条醒ヶ井にある近藤の休息所に、本日夕刻、伊東を招きたいという。

「伊東さん、これは罨です。行つてはだめだ！」

藤堂は叫んだが、伊東は書状を広げてみせながら、目元の涼しい色白おもての面に余裕の笑みを浮べてみせた。

「近藤さんは私に相談があるそうだ。大政奉還が成立したことで世間では討幕の氣運がますます高まり、新選組の立場も危ういものになってきている。かたくなだった彼らもここへ来てようやく時流に眼を向ける氣になったのだろう。その証拠に、ほら、我々御陵衛士の活動資金として、三百両もの大金を提供したいとまで言ってきた」

藤堂は書名に目を落とし、そして、相手の顔を見た。

伊東には、弱点と言えるような弱点が見当たらない。

すらりとした長身で、本紫の着物に銀鼠色の袴を付けた姿は、武士というよりは役者のようだ。

それでいて、北辰一刀流免許皆伝の腕を持ち、江戸深川佐賀町に剣術の道場を開いていた。同流の藤堂の誘いに応じ、実弟の三樹三郎他、篠原泰之進、服部武雄ら門弟七名を率いて新選組に入隊したのは、みずからの腕と才覚をもって、新撰組を改革し、時流に乗り出すためだった。

年は土方と同じ三十二才。

役職も副長に並ぶ参謀職にありながら、近藤・土方が切腹や斬首を

申し付けようとするのを、「まあ、まあ」となだめに回るのが常だったから、隊士の中には伊東のおかげで命拾いした者も少なくない。新撰組での人気は絶大で、新撰組から比較的すんなりと分離できたのも、その人気のなせるわざだ。

だが、その能力の高さと、おのれの實力に対する絶対的な自信こそが、実は最大の弱点だということに、伊東自身は気付くことができない。

「時流がどうであろうと、あの二人は変わりませんよ。このこ出かけて行ったりしたら、隊規違反すたすたにやられるのがおちだ」

「藤堂君、我々は新選組を脱退したのではなく、あくまでも分離のかたちを取っているのだから隊規違反にはあたらないよ。第一、新選組を離れてもう五ヶ月だ。本当に君の言う通りなら、我々はとつくの昔に殺されている」

藤堂は唇をかみしめた。

伊東は優れた論客だ。

議論では絶対に勝てない。

「あなたは御陵衛士にはなくてはならない人です。どうしても行くとおっしゃるのなら、俺があなたを守ります。同行させて下さい」

「そうです。あなたは大切な方だ。我々も是非ご同行させて下さい」
藤堂の言葉に、篠原泰之進が呼応して立ち上がった。

そうすると、伊東を取り囲むようにして話を聞いていた他の者たちも次々と立ち上がり、同行させて欲しいと言いだした。

「君たちの気持ちがありがたいが、呼ばれてもいない者までがぞろぞろと押しかけて行ったのでは、怖じ気づいていると思われてしまう。私はこう見えても伊東道場の道場主までつとめた男だ。たとえ

何かあったとしてもみすみす殺されるようなことはないから、安心しなさい」

静かな微笑をたたえた伊東の言葉は、やはり自信に満ちていた。

薩摩藩の大久保利通とわたりをつけ、勤王の志士として鮮やかに轉身することができたのは、他ならぬ伊東の働きによるものである。

その巧みな弁舌で、どんな相手でも屈服させることができる。本人も周囲の者たちも、そう思い込んでいる限り、もう誰も伊東を引き止めることはできなかった。

午後になると伊東は駕籠を呼び、気軽な調子で出かけて行った。

伊東甲子太郎2

伊東が出かける少し前、新選組の屯所では、近藤、土方以下、主だった幹部たちが集まって、今夜の計画に関する最後の詰めを行っていた。

それは恐ろしい暗殺計画だった。

永倉、原田、そして藤堂が危惧していたように、土方は御陵衛士を許したわけではなかったのだ。

薩長同盟や大政奉還の成立は、局長の近藤はもちろん、新選組全体に少なからぬ衝撃を与えたが、土方だけは動じなかった。

土方歳三という男は、おのが作り上げた新選組を守ることしか考えていない。

何人もの優れた隊士を引き連れて新選組を去って行った伊東のことを心の底から憎んでいた。

だが、伊東は自他共に認める優れた剣客である。

まともに戦えば、こちらもかなりの犠牲を覚悟しなくてはならない。土方は、かつて芹沢鴨を暗殺した時と同じように、酒の力を借りることにした。

「局長の休息所へは、局長と私の他に、尾形君、山崎君にも行ってもらおう」

土方は、伊東の警戒心を解くために、伊東と仲の良かった尾形俊太郎と、人あたりの良い山崎烝の二人を伊東の接待役に指名した。

「泥酔した伊東を始末するのは……」

「俺の役目だ」

冷酷な笑いを浮べたのは「人斬り鋏次郎」こと大石鋏次郎である。池田屋の変の四ヶ月後に入隊したこの男は、公然と人を斬るために入隊した変わり種で、暗殺、切腹時の介錯、不逞浪人との斬り合いなど、あらゆる場面で殺人剣をふるい、殺した人の数は自分でも覚えていないほどだ。

近藤はこの男を重宝がったが、土方は、大石が人を斬殺する瞬間に見せる喜悦に満ちた顔が不快でならない。

だからこの時も、冷ややかな一瞥を送っただけだった。

土方の筋書きは、それだけでは終わらない。

暗殺された伊東の死体をおとりにして、残りの御陵衛士をおびき寄せ、高台寺党を一気に根絶やしにすることまで決まっていた。

「残りの御陵衛士を待ち伏せする役は我々に任せて欲しい」

揃って立ち上がったのは永倉と原田だった。

土方は鋭い目で二人をにらんだが、この時ばかりは永倉も原田も一歩も引かず、真っ向から相手をにらみ返した。

「君たちが考えていることを、私がわからないとでも思っているのか」

「副長」

すごみを帯びた土方の声を、近藤が静かに遮った。

「君たちの出動は局長の私が許可しよう」

近藤は土方の方を見ないまま、永倉と原田に向ってうなずいた。

その一言で、緊張した空気が一気に弛緩する。

永倉と原田が安堵の表情を浮べたのに対し、土方の顔からはいかなる感情も読み取れない。

「永倉君、君の隊には三浦という隊士がいたな」

土方の唐突な質問に、永倉は表情を引き締めた。

三浦常次郎は、もともとは藤堂率いる八番隊に所属していたが、御陵衛士の離脱による再編成で永倉の二番隊に移された。年は六十を超えており、新選組では一番の高齢だ。

特に剣術が優れているわけでもなく、どうして新選組に入隊できたのかは知らないが、藤堂は、親子以上に年の離れた三浦のことを、さりげなく気にかけていた。

三浦が永倉の隊に配属されているのも、藤堂に頼まれて、永倉が下工作をしてやったからだった。

「三浦が何か？」

「私の部屋へ来るように伝えてくれ」

いやな予感がした。

土方の言葉を伝えると、三浦は哀れなほどに怯え始めた。

平隊士が副長室に呼ばれることなど滅多にないのだから無理もない。

「一体、何を考えていやがる」

土方の冷徹な横顔を思い浮かべながら、永倉は暗い思いでつぶやいた。

肩を落としてとぼとぼと廊下を歩いていく三浦の背中が、いつもよりさらに小さく見えた。

伊東甲子太郎3

襖の奥で、誰かが苦しげに咳き込んでいる。

廊下に佇んだ土方は、襖をにらみつけたまま動かない。

その咳がようやく落ち着いたところで、今来たような顔をして襖を開けた。

部屋に真ん中に敷かれた布団には、痩せた青年が横たわっている。

この男こそ、新選組最強の剣士とうたわれる一番隊長の沖田総司である。

「具合はどうだ？」

軽い調子で告げると、沖田は嬉しそうに目を細めた。

「私はこの通り元気です。いつまでも布団に縛り付けられて退屈していたところです。それより土方さんこそどうかなさったんですか？ 何だかしよぼくれた顔をして、ひょっとして鬼の攪乱かな？」

他の隊士が言ったらその場で首が飛びかねない台詞を沖田はスラスラと言つてのけ、無邪気な笑みを向けてきた。

「鬼の攪乱で悪かったな」

わざとふてくされたような顔をして、土方はどかりと沖田の枕元に胡坐を組んだ。

ぶつきらばうな口調とは裏腹に、起き上がろうとする沖田の身体を支えてやる腕はいたわるような満ちている。

「土方さん、困るなあ、過保護はやめて下さいよ。そうやって土方さんが世話をやくから、他の連中まで私をいつまでも病人扱いする

んですよ。それはそうと、こんぺい糖はいかがですか？昨日、壬生方面を巡回した隊士が、子供たちから言付かったと言って、持って来てくれたんです」

「お前は本当によくしゃべるな」

呆れたようにつぶやきながら、土方は出されたこんぺい糖を一粒つまみ、ぽんと口の中に放り込んだ。

「それで？」

「それでとは？」

「話があるんでしょう？聞いてあげるから言っして下さい」

土方は小さく吐息をもらす。

子供に対するような口調だが、この男がすることには、不思議と腹が立たないのだ。

九歳で天然理心流に入門した沖田総司は、剣の上では土方の兄弟子ということになる。

子供の頃からまれに見る天分を示し、十二歳で白河藩の剣術指南役と試合して勝利した。

沖田が本気になれば、土方どころか、近藤だって手も足も出ない。

（だがそれも、元気だった頃のことだ）

細くなった腕を伸ばして、こんぺい糖をつまむ無邪気な横顔を、土方はそつと盗み見た。

天賦の才を持つ目の前の青年が労咳という不治の病に侵されていることが誰の目にも明らかになったのは、現在の屯所に移ってからである。

沖田自身は、自分の身体の変調を長い間、誰にも告げず、ひた隠しにしてきた。

「何でもねえ。ただ、俺もいよいよ本物の鬼になってきたな、思
つてさ……」

あいまいな言い方だったにも関わらず、沖田にはこちらが考えてい
ることが、手に取るようにわかるようだった。

「土方さんは鬼なんかじゃありませんよ。ただ、土方さん以外に鬼
のふりができる人がいないだけです」

この青年の透き通った瞳は、真実だけを映す鏡だ。
まるで神の啓示のように、沖田の言葉は土方の胸におさまった。

「私は本当の土方さんを知っているけど、他の人は騙されている。
新選組には鬼が必要で、それを演じきれる人が他にいないから、や
っているだけでしょう？ 本当は私が代ってあげられるといいんです
けどね。土方さんみたいに器用じゃないからなあ……」

「よせやい、お前に鬼は似合わねえ」

思わず苦笑して告げると、沖田もくすりと笑い、痩せて骨ばった手
が土方の手の上に重ねてきた。

「大丈夫ですよ」

瞳と同じ曇りのない声。

「みんなが土方さんを怖がって逃げ出しても、私だけは最後までつ
いて行ってあげますから。あなたは自分が行きたい道を進めばいい」

「だが、総司、お前は……お前自身の進む道はどんなんだ！？」

思わず本音を漏らすと、沖田は笑みを深くした。

「私は土方さんと違って面倒なことを考えるのは苦手ですから。自

分がどっちへ行くかは、近藤先生と土方さんに全てお任せしていますので、楽なもんですよ」

笑っていられる状況ではないのに、土方は思わず吹き出した。暗く陰惨な日々の中で、目の前の青年にどれだけ救われたかわからない。

「総司、今の言葉を忘れるなよ。まずは身体を治すことだ。薬はちゃんと飲んでるだろうな。おっと、水を切らしてるじゃないか、汲んできてやるからちよつと待ってる。逃げるんじゃないぞ！」

土方は明るい顔で立ち上がる、遠ざかっていく土方の足音を聞きながら、沖田は自分の手を見つめていた。

「本当に、どこまでも一緒に行けたら……」

後に続くことは、こみあげてきた咳によってかき消された。

激しく咳き込むたびに、口に当てていた手のひらに、真っ赤な鮮血がしたたった。

沖田はその手を握り込み、こぶしで勢いよく涙を拭う。

残された時間は、わずかしかない。

前に進むことは、もうできない。

沖田には、自分の死がもうそこまで来ていることが、わかりすぎるぐらいわかっていた。

土方の筋書き通りにことは進んだ。

芹沢鴨の死の真相を知らされていない伊東は、自分が芹沢と同じ道をたどっていることに気付かない。

近藤に肩を抱かんばかりに出迎えられ、尾形俊太郎や山崎烝にさんざん持ち上げられ、勧められるままに盃を傾け熱弁をふるった。

伊東の話に水をさす者は誰もいない。

この時ばかりは、いつも無愛想な土方までが、別人のように笑顔を振りまいた。

「伊東さんの見識には恐れ入りました。今日は本当に良いお話をお聞かせ頂いた。我々もこれからはもつと前向きに薩長の土と交わっていかなくてはなりません」

玄関まで見送りに出た土方に、こぼれるような笑みを向けられて、伊東は嬉しそうにうなずいた。

「土方さんがこれほど話のわかる御仁とは、失礼ながら思いませんでした。及ばずながら私も、新選組のためにおおいに尽力させて頂きたいと思います」

「本日はわざわざお運び頂いたにも関わらず、お約束の三百両をお渡しすることができず、誠に申し訳ない。明朝、会津藩から金子が届き次第、月真院へお届けしますので、何卒ご容赦を……」

申し訳なさそうに頭を下げる近藤に、鷹揚にうなずいてみせてから、伊東は悠々と表に出た。

「伊東先生、駕籠をお呼びしましょうか？」

「いや結構。酔い覚まし方々、歩いて帰ります」

「では、これを」

山崎が下僕のような従順さで歩み寄り、そつと提灯を手渡した。

十六夜の月が照る下を菊桐の紋が入った提灯の灯火がゆらゆらと揺れながら次第に小さくなっていく。

「行け」

低いつばやき合図に、背後に控えていたいくつもの黒い影が、伊東が消えた方角に向って動きす。

それを見つめる土方の目は、氷のように冷ややかだった。

七条油小路 1

「戻ってこない」

藤堂は沈痛な面持ちでつぶやいた。

時刻は既に子の刻ねに近い。

無言で刀を引き寄せようとした時、最年長の篠原に遮られた。

「どこへ行く？」

とがめるような声だった。

「七条醒ヶ井へ。伊東さんを迎えに行つてきます」

（もう、間に合わないかも知れませんが……）

最後の方は心の中だけでつぶやき、刀をつかんで立ち上がると、なおも篠原が追いつがってきた。

「藤堂君、もう少し待ってみよう。君には言わなかったが、実は斉藤君が様子を探りに行ってくれている。新井君、清原君は江戸へ出張中だし、阿部君、内海君も明日まで帰らない。この上、君まで出かけてしまったのでは、今度はこっちが危険になる」

「斉藤が？」

振り返った藤堂の顔の険しさに、篠原は一瞬たじろいだ。

「本当に自分から様子を見てくると言っただのですか？」

「そつだ、それが何か……」

「くそつ、やられた！」

叫んだ藤堂は勢い良く襖を引き開けると、表玄関へ続く廊下を風のように駆け抜けた。

斉藤は与えられた任務は確実にこなすが、自分から進んで動くよう

な人間じゃない。

誰かが斉藤を動かしている。

そしてそれは、土方をおいて他には考えられない。

表玄関の格子戸を開けようとした藤堂は、格子戸の向こうに人の気配を感じて身構えた。

「誰だ！」

「油小路の町役人です。こちらの御印の入った提灯をお持ちの御仁が、むごたらしく殺されて七条と油小路の四つ辻に打ち捨てられています。至急引き取りに来て頂きますようお願い申し上げます」

「兄上が！？」

悲痛な声をあげたのは、伊東の弟、三樹三郎だった。

「何てことだ！」

「まさか、伊東先生が……」

「相手はやはり新選組なのか！？」

他の連中が口々に叫び立てるのを、どこか遠くで聞きながら、藤堂は自分が必死でつかもうとしていたものが、手の届く寸前で粉々に崩れ去って行くのを感じていた。

（山南さん、俺はあなたとは違う生き方をしたかった……）

山南の死後、明里の行方はようとして知れない。

山南の後を追って自害したのではないかと言う者もいる。

寂しげな明里の顔に綾野の顔が重なり、藤堂は思わず目を閉じた。

「とにかく、伊東さんの亡骸を、そのままにしておくわけにはいかなない」

篠原泰之進は、大広間に集まった七名の顔を見回した。

皆の意見を聞かせて欲しいと促され、まっさきに口を開いたのは、赤穂出身で伊東道場の門下生だった服部武雄だった。

「敵は我々を皆殺しにするつもりで網を張っているはずです。行けば必ず斬り合いになるでしょう。武具甲冑を身につけて行くのが妥当と思われます」

「しかし、服部君、こっちは多勢に無勢だ。戦いになれば討死には避けられまい。甲冑姿で路上に屍を晒したとあつては、武士の名折れだと思っただが……」

「武士の名折れ」という言葉に敏感に反応した男たちは、一様に暗い顔をして俯いた。

「礼を尽くして引き取りに行けば、新選組もあるいは手を出さないのではないのでしょうか？」

「三樹君、この期におよんで何を言っているんだ？ 新選組の連中がまともな人間ではないことは、とくに証明されているではないか！」

気弱な声を出したのは三樹三郎に、服部が鋭く言い返す。
様々な意見が飛び交う中、藤堂だけが無言だった。

「藤堂君、君はどう思う？」

そんな様子を目にとめたのか、篠原が唐突に声をかけてきた。

自分だけの物思いに沈んでいた藤堂にとって、話し合いの内容はほとんど意味を持たなかったが、篠原に目で促され藤堂は仕方なく口を開いた。

「相手は人数が多い上に重装備だ。甲冑は避けた方がいいでしょう」「そうか、君もそう思うか。しかし我々は武士だ。死を覚悟してでも行かねばなるまい」

リーダー格の篠原が独り合点して立ち上がると、他の者も連動して立ち上がる。

その様子を黙って見つめる藤堂に、三樹が声をかけてきた。

「やはり我々は、死ぬしかないのでしょうか」
「さすがのような目をしていた。」

伊東と姓が違うのは養子に出されたからだという。

それでも兄を慕い、優秀な兄に引きずられるようにして、ここまで来てしまったのだろう。

そして今は、頼りにしていた兄を失い、不安でたまらないのだ。

（まるで俺自身だ）

妙な感慨がわいてきた。

甲子太郎のように優秀な兄を持たなければ、平凡な人生が送れたに違いない。

「三樹さん、大丈夫ですよ」

藤堂はにこりと笑い、握っていた鉢巻を三樹に手渡した。

「なるべく身軽に。そして、俺の側を離れないようにして下さい」

高台寺党は今夜、壊滅する。

だが、この男だけは逃がしてやろう。

神妙な顔でうなずく三樹にもう一度微笑みかけてやってから、藤堂は夜の闇に踏み出した。

藤堂ら御陵衛士七名は、伊東の死体を運ぶために駕籠かきを雇い、身を切るような寒さの中、油小路へと急いだ。

東大路を下って五条へ入り、五条大橋を渡って東へ進めば、油小路に出ることができる。

深夜の都大路は不気味なほど静かで、猫の仔一匹出てこない。それぞれの思いを胸にした男達は、白い息を吐きながら、ただ黙々と進んで行った。

藤堂はふと足をとめ、夜空を仰ぎ見た。

冷たく澄んだ夜空には、いくつもの星がまたたいている。

あの空の上から見下ろした時、一人の生き死になんてものは、本当に取るに足らないものだ。

大切な人を不幸にしてまで土道に殉じること、どれほどの価値があるのだろう。

だが今は、それ以外のいかなる選択肢もないような気がした。

「藤堂君」

振り返った誰かに名を呼ばれ、ふいに現実に取り戻された。

再び歩き出した藤堂の右斜め前方に、かつて新選組が屯所にしていた西本願寺の太鼓堂が、黒い影を浮かび上がらせている。

やがて眼前に油小路と七条通りが交差する十字路が迫ってきた。十字路の真ん中には、伊東甲子太郎の死体が棒切れのように転がっている。

「兄上！」

三樹三郎の叫び声が、凍てついた闇にこだました。

「待て、行くな！」

咄嗟の叫びは三樹の耳には届かない。

わき目も振らずに伊東の死体に駆け寄っていく。

その前方の闇からは、黒装束の男達が次々と湧き出てきた。

小さく舌打ちした藤堂はすばやく周囲に視線を走らせた。

正面から約二十名、

右手からも同じく20名。

月明かりの下、顔を判別することまではできないが、新選組であることは間違いない。

「たった七名を相手に四十名とは土方らしいぜ」

駆ける藤堂の瞳には、死体にしがみつくような姿勢で地面にしゃがみこんでいる三樹三郎の後ろ姿が映っていた。

その背後に白刃をひらめかせた複数の敵が迫っている。

藤堂は刀に手をかけたまま。地面を蹴って跳躍した。

再び地面に足を着けた時には、目の前の影が一つ消えていた。

手柄を奪い合うかのように、四方から一斉に刀が伸びてくる。

横合いから伸びてきた切先の一つが頬をかすったが、振り向きざまにその刀をなぎ払い、三樹をかばうようにして敵の前に立ちふさがった。

「死ぬまで付き合ってやるから順番にかかってこい」

微笑む藤堂の足元には、黒装束の死体がすでに二つ転がっていた。月光に照らし出された美しい顔に、流れる鮮血が色を添えていた。

そこそこ剣が使えるものなら、相手の放つ気でその腕がわかる。

男たちの間に動揺が走った瞬間を、藤堂は見逃さなかった。

大げさに刀をふりかぶり、そのまま振り下ろすと見せかけて、敵の注意を引き寄せた。

「逃げる！」

すばやく身を翻した時には、三樹の首根っこをつかんでいた。そのまま無理やり三樹を立たせ、最も手薄になっている方角に、そ

の背中を押し出した。

三樹を含む4名の御陵衛士が、藤堂が示した方角に一目散に逃げ出した。

四人の先頭を駆けているのは篠原泰之進だった。

藤堂は逃げなかった。

七条油小路には、藤堂の他に最後まで武装を主張した服部武雄と、逃げ遅れた毛内有之介が残っていた。

四つ辻の三カ所で、三対四十のすさまじい死闘が始まった。

新選組は単なる剣客集団ではなく、集団殺法を徹底的に仕込まれた武闘組織である。

それだけに、統制の取れた動きには無駄がなく、小柄な藤堂を十数人の屈強な男たちが取り囲んでいる様は、獲物を狙う狼のようだった。

やらなければやられるのは新撰組も同じことだ。

たとえ命を落とさなくても、ここで無様な姿を見せれば、士道不覚悟で腹を切られる。

それがわかってから、決死の覚悟で次々と斬りかかってくる。

獣じみた咆哮もろとも、正面の敵が刀を振り下ろす。

半身をひねって、相手の切先を鰐元で受けた藤堂は、そのまま勢いよくすり上げた。

思わぬ反撃にひるんだ敵は、体勢を立て直そうとしてあえいだが、刀を構えなおすこともできずに、すさまじい一撃をあびてのけぞった。

肉が裂ける鈍い音がして、周囲に血のにおいがたちこめる。

七条油小路2

藤堂は新選組の手口を知り尽くしていた。

一人倒れれば、また別の一人がかかってくる。

圧倒的多数で敵を倒すのが、土方が考え出した新選組の戦法なのだ。

今、目の前で展開されている「草攻剣」は、複数の隊士が1人ずつ順番に攻撃していくもので、最初の1人が討ち損じても、2人目、3人目が次々と斬りかかり、絶え間なく繰り出される新手の、しかも剣技の異なる攻撃に、やがて敵が疲れ果て、力尽きるのを待つてとどめをさすというもの。

藤堂は刀を正眼に構え、新手の敵を鋭くにらみつけた。

頬に刻み付けられた傷から流れ出る鮮血が、今では白っぽい着物の衿に、どす黒いしみを作っている。

血糊のついた刀が月光を浴びて怪しく光り、その光に誘われるように新手の敵が動き出したその刹那……。

「やめろ、下がれ！」

腹の底に響くような声が彼我の動きを遮った。

「こいつは、お前らが束になったってかなう相手じゃない。こいつの顔をよく見る。額の傷は伊達じゃない」

仁王立ちした男の声は永倉のものだった。

「ここは俺にまかせて、あっちを援護しろ」

永倉があごをしゃくった先で、服部武雄が民家の門柱を背ににして戦っていた。

腰に馬乗り提灯を差し、右手には三尺を超える長刀を、左手には脇差しを持って奮戦する姿はまさしく鬼神そのもので、討ちかかる者は片っ端から斬り捨てられ、足元にはいくつもの死体が積み重なっていた。

指示を受けた数名の隊士が、加勢のために走り出した。

味方が手薄になった所で、永倉は目の前の隊士をつきとばすようにして、藤堂に向かって突進した。

「ウォーリーリヤー！ー！」

すさまじい気合もろとも刀を上段に構えると、藤堂ではなく黒装束の男たちが後ずさった。

そのまま一気に振り下ろした刀を、藤堂がすかさず受け流す。

双方の刃が激しくぶつかり、甲高い金属音とともに火花がはじけ、二人同時に飛びすさった。

間髪おかぬ二の太刀は、渾身の力で鰐元で受けた。

鰐ざり合いになっても、永倉はぐんぐん押しまくる。

互角の腕を持つ剣客同志の戦いには、他の者を寄せ付けない気迫がみなぎり、他の隊士らは、それを遠巻きに見守ることしかできなかった。

それは、永倉にとって、一世一代の大芝居だった。

「平助のことは俺にまかせろ。お前はできるだけ多くの隊士を率いて、別の敵を討て」

戦闘の始まる少し前、見張りのために借りた蕎麦屋の二階から下を見下ろしていた永倉は、凍てつく路上にうち捨てられている伊東の死体から目を離さずにつぶやいた。

土方の芝居はすでに幕を上げている。

それに対抗するためには、別の芝居をうたねばならない。
鋭い目をさらに鋭くぎらつかせ、原田左之助がうなずいた。
原田が背にした床柱の傍らには、愛用の長槍が立てかけてある。

最初の一撃を受けた時、藤堂は全てを理解した。

永倉は鐙ぜり合いと見せかけて、藤堂を他の隊士から引き離れた。

「平助、早く逃げろ」

「でも、敵に後ろを見せることは……」

「ちがう、敵じゃない！」

藤堂の言葉をするどくはね返した永倉の目には、必死の色が浮かんでいた。

「さきがけ 魁……先生……」

黒装束の群の中から漏れ出たうわずった声。
それを合図に一同が一斉にあとずさる。

かつて、新撰組四天王に名を連ねていた美貌の剣士につけられた呼称は、今も新撰組の中で鳴り響いている。

その日出動していた者の多くが、御陵衛士の分離後に入隊した新入隊士だったが、藤堂平助の名を知らぬ者は一人としていなかった。

「俺はお前の敵になったりはしない。これまでも、そしてこれから
も……」

永倉は言葉を続けながら、北東の角を振り返った。

服部武雄の勇猛さは相変わらずだが、そこから少し離れた所では、
毛内有之介が大勢の隊士たちに追いつめられている。

毛内が倒れれば、血に飢えた狼たちの攻撃は、残る服部と藤堂に集

中する。

（まずいな）

もはや一刻の猶予もならない。

心の中で舌打ちした永倉は、祈るような思いで藤堂に向き直った。

「こんな所で死ぬんじゃない。お前が考えているように、新しい時代が必ずくる。山南さんも伊東さんももういない。新選組も消えてなくなる。今度こそ自分で自分の人生を切り開くんだ」

「永倉さん……」

動揺を隠せない藤堂を、永倉の力強い眼差しがしっかりと受けとめた。

「なぜそんなことを？永倉さんはそれで……」

なおも芝居を続けながら、永倉は目だけで笑ってみせた。

「俺か？俺はいいのさ。好きでこの道を選んだのだから。だが、

お前は違つだろ？お前の人生はこれからだ。ほら、早く行け！」

刀身にぐつと力を加え、鰐くわごと藤堂を押しやると、かみ合っていた二つの刃はわけもなく離れた。

「永倉さん……」

藤堂は刀を構えたままの姿勢で、数歩下がりに立ち止まった。

「行けよ」

「永倉さん」

「ばかやろう！さつさと行け！」

「永倉さん、ありがとう」

藤堂はくるりと背を向けて走り出した。

永倉の視界を、しみのような影が遮ったのは、その直後だった。

ありえない展開に、永倉の目が極限まで見開かれる。

黒いしみのように見えたのは、それまで戦闘に参加せず、民家の物陰にじっと潜んでいた三浦常次郎だった。

三浦は、藤堂率いる八番隊に所属し、親子のように年が離れているにも関わらず、藤堂を崇拜しきっていた。

敵に後ろ傷を負わされ、本来なら切腹になるところを藤堂の機転で命拾いしたこともある。

高齡のため、永倉の配慮で最前線から外されており、いつも見張り役に終始したが、この日は土方の特命を受けていた。

「本人に気付かれないように、密かに永倉を援護せよ」

永倉自身も知らされていない、これが特命の全てだった。

「君は八番隊にいた頃、藤堂から突きを習っていたらしいな。何かあったら得意の突きで永倉に加勢してやるといい」

土方は最後にそう付け加えた。

三浦は不気味な思いで土方の部屋を出た。

自分のような老隊士に永倉の援護など出来るわけがない。

鬼副長は、どうしてそのような役目を、自分に与えるのか。

「土道を試すつもりかもしれない」

土道不覚悟は切腹である。

三浦はにわかに恐ろしくなった。

とにかく永倉に何かあった時には飛び出すつもりで、闇にじっと身を隠し、刀を握り締めたまま、戦闘の推移を見守っていた。

永倉が藤堂に斬りかかった時も、三浦は物陰に潜んでいた。夜目のきかない三浦には、永倉の相手が誰なのかわからない。

「永倉さんが斬られるはずない」
はらはらしながら見ていると、敵が永倉に背を向けて、自分が潜んでいる方角に走ってきた。

（永倉さんほどの人が敵を取り逃がすとは……）
さぞかし腕の立つ相手に違いない。
気が付かなかったことにして、このまま見逃してしまおうと決めた時、背中がぞくりと粟立った。

（副長だ。土方副長がどこから私を見ている）
それは単なる疑心暗鬼でしかなかったが、三浦は震える手で刀を握り締め、突きの体勢を保ったまま、一心不乱に相手の背中に体当たりした。

確かな手応えが伝わってきた。
三浦の刃は完璧に相手を貫いている。

「やった！やったぞ！」
三浦は狂喜して飛び上がった。
生まれて初めての感触に、全身が身震いするのを感じていた。

背中に鋭い衝撃を感じて藤堂は立ち止まった。
胸のあたりに目をやると、自分を貫いている刀の切先が、鈍い光を放っていた。

（後ろ傷……土道不覚悟ってことか……）

上半身がぐらりと揺れた。

薄く笑った唇から一筋の鮮血がこぼれおち、激しい痛みと薄れゆく意識の中で、おのれの人生の空しさを思った。

他人に振り回されてばかりの短い生涯だったが、不思議と後悔する気持ちにはなれなかった。

たとえ塵芥ちりあくたのような生き方であっても、懸命に生きたことに変わりはない。

（人は、生まれ変わるものなのだろうか？もしも、生まれ変わるなら、そして、また……お前に、会える……の、なら……）

切れ切れだった思念はそこで途切れ、藤堂はみずからが流した血の海の中に倒れ込んだ。

後はただ一面に咲く撫子と、その中で微笑む美しい少女のイメージが、断末魔の苦しみを和らげてくれた。

動かなくなった藤堂に、隊士たちが群がった。

見渡せば、地面に立って動いているのは、黒装束の新選組隊士だけになっていた。

大勢に取り囲まれ、なますのように切り刻まれた毛内有之介は、見るも無残な肉の固まりになっていた。

一騎当千の戦い振りで隊士らを寄せ付けなかった服部武雄も、前後左右に満身二十カ所以上の傷を負い、両刀を握り締めたまま死んでいた。

永倉新八は、放心したまま動けないでいた。

藤堂の、「ありがとう」という最後の言葉と、その時見せた笑顔だけが現実で、今、目の前で起こっていることは、全て別の世界の出来事でもあるかのようだ。

朱に染まりて1

「どけ、どけ、どけえー！ー！」

すさまじい勢いで突進して来たのは、血槍を手にした原田だった。金縛りにあつたように動けなくなつた永倉の傍らを駆け抜けた原田は、長槍を振り回しながら隊士たちを蹴散らすと、血の海の中にうつ伏せに横たわっている藤堂の屍しかばねを抱き起こした。

「な、なぜ、こんな……」

絶句するなり、冷たい身体を抱きしめた。

そのまましばらく肩を震わせていたが、再び顔を上げた時には悪鬼のような形相になっていた。

「この傷をつけたのは誰だ！」

怒気をはらんだ大声に、隊士らは互いに顔を見交わした。

それから周囲を見回して、離れたところに立っていた三浦常次郎を、ためらいがちに指差した。

原田は藤堂の身体をそつと横たえて立ち上がり、傲然と三浦をにらみつけた。

長身の背後に憤怒の炎が見えた気がした。

新撰組一の美丈夫だが、気の短く、本気で怒ると何をするかわからない。

そんな男ににらまれて、三浦はわけがわからないまま、全身に刃を突きつけられたかのように真っ青になった。

「来い」

「えっ？」

「さっさと、こっちへ来い！」

「はっ、はい！」

三浦があわてて駆け寄ると、原田はその胸倉を容赦なくわしづかんだ。

「お前が殺したやつの名前を言ってみろ」

「な、名前……ですか？」

原田から開放された三浦は、たった今、自分が倒した相手に歩み寄り、恐る恐る覗き込んだ。

「ああ！」

地の底から絞り出したような悲鳴が皆の耳朵を打つ。

そこには、自分が何度も助けられ、体長として仰ぎながらも内心では息子のように思っていた青年の血まみれの死体が横たわっていた。へなへなとその場に座り込んでしまった老隊士を、原田は容赦なく踏みつけた。

他の隊士らがじりじりと後ずさりする中、血と涙と泥でぐちゃぐちゃに汚れた三浦の顔面に槍の穂先を突きつけた。

「平助に代わって俺がお前をあの手へ送ってやる。平助は、あいつはな、お前みたいなクズにやられるようなやつじゃないんだ！それをお前は……お前は……」

持ち上がった腕が、槍を振り下ろす直前で停止した。

「新八、邪魔するな！」

原田は三浦をにらみつけたまま、ぎりりと奥歯をかみ締めたが、背後から永倉につかまれた腕は、ぴくりとも動かない。

「左之、もうよせ」

「なぜだ?! お前だって、こいつが憎いはずだ」

「三浦君が悪いんじゃない。命令に従っただけだ」

「命令？一体誰の！？」

原田は吼えたが、永倉は震える相手の肩を、なだめるように軽くたたいただけだった。

「三浦君、ご苦労だった」

ねぎらいの言葉をかけてやるだけの余裕を取り戻すことができたのは、原田のおかげだろう。

永倉は原田の肩をもう一度ポンとたたいてから、やるべきことをやるために顔を上げた。

「島田君」

「はっ」

相撲取りのような巨漢を誇る伍長の島田魁が、ずっと前に進み出た。

「先に帰っていてくれ。原田と俺はしばらく様子を見てから戻る」

「……………」

この日出動した数少ない古参隊士の一人である島田は、何か言いたそうな顔で永倉を見たが、そのまま無言で一礼し、他の隊士らを率いて立ち去った。

三浦もがっくりとうなだれたまま、足を引きずるようにして最後尾についた。

隊士たちを見送った永倉は、藤堂の傍らに膝をつき、そつと頬に触れてみたが、冷たい感触にびくりと震えた指先を、なすすべもなく握り込んだ。

「平助、俺と原田は、どうしてもお前を助けたかったんだ。だが、あいつの方が一枚も二枚も上手だった。すまないなあ、今の俺達には、お前を葬ってやることさえできないんだ」

彼我の血で汚れているにも関わらず、青白い月光の下で見る藤堂の死に顔は、不思議なほど穏やかで美しかった。

それを食い入るように見つめる永倉の頬を涙が伝う。

その傍らにひざまずいた原田も、俯いたまま泣きながら肩を震わせた。

御陵衛士の死体は、そのまま四つ辻に放置することが決まっていた。伊東の死体で藤堂らをおびき寄せ殺害したように、今度は複数の屍で生き残った衛士をおびきよせるのだ。

「新八、俺は行くぜ」

決然と言い放った原田を、永倉は眉間にしわよせて仰ぎ見た。

「どこへだ？」

「局長の所に決まっているじゃないか、俺はもう我慢できない。こんな卑怯なことはやめるよう局長を説得する」

「土方が反対するぜ」

「その時は俺が土方を斬ってやる」

「無駄だ。やめとけ」

「俺が死んだら、あだ討ち頼む」

本気が冗談からわからぬ言葉を残し、原田は闇の中に溶け込んだ。見上げれば、空には変わらず星が瞬いていた。七条油小路に再び静寂が戻ってきた。

「御陵衛士斬殺」の報はまたたく間に洛中を駆け巡り、翌日の夜には薩摩藩邸近くに往診に出ていた川上玄斎の耳にも入った。

その日玄斎は、午後からずっと外出していた。

診療所には「休診」の札を掲げてあるが、なじみの患者の簡単な薬の調合や手当でぐらいなら綾野がやってくれているはずだった。

玄斎が耳にした噂は、御陵衛士の何人かが七条油小路の四つ辻で斬殺されたというもので、殺された御陵衛士の中に藤堂が含まれているかどうかまではわからなかった。

（何ということだ！）

最初に考えたのは綾野のことだった。

その年の秋、綾野は正式に川上家の養女になっている。

藤堂にもしものがあれば、そして綾野がそのことを知ったら、どんなことになるか。

玄斎は町駕籠を拾って急いで診療所に戻り、息せききって玄関の戸を開けた。

「綾野！」

いつも笑顔で玄関先まで迎えてくれる綾野が今夜に限って出てこない。

患者の診療にあてている部屋はもちろん、奥の座敷や台所にも人影はなかった。

真つ暗な部屋の隅に置かれた文机の上に一通の書き置きが置かれていた。

表には「御父上様」の文字が見える。

震える手で行灯の明かりをつけた玄斎は、中身に目を凝らしたが、終わりまで読まずに書状を取り落とした。

玄斎の外出中、たまたま訪れた患者から御陵衛士のことを聞いた綾野は、七条油小路へ向ったらしい。

書状が認められたのがいつなのかはわからないが、夜はすっかりふけていた。

真っ暗な闇の中で、書状だけがその存在を主張してまぶしいほどに白い。

玄斎はぞっとする予感に身震いした。

朱に染まりて2

冬の日はあるという間に暮れていく。

日中は、物見高い見物人で黒山の人だかりだった七条油小路も、日没と共にひっそりと静まりかえっていた。

人気がない夜の道を、綾野は夢中で走っていた。

昨夜とはうって変わって、雪雲が厚く垂れ込めた空には月も星もない。

真っ暗な道を、ただただ必死で走り続けながら、藤堂のことだけを考えていた。

耳に届くのは、自分の荒い息遣いと小さな足音だけ。

身を切るような寒さも感じなかった。

「！」

七条油小路にたどり着いた綾野は、息をのんでその場に立ちすくんだ。

四つ辻の北には伊東甲子太郎の、北東の角には服部と毛内の、そして七条通りを西へ少し行った所には藤堂の死体がうち捨てられていた。

「藤堂様、藤堂様……」

綾野は何度も相手の名を呼びながら、その傍らに歩みよったが、応える声は聞こえない。

「何て……何てひどい、一体、誰が……」

そつと両手に包み込んだ左の冷たさは、藤堂が既にこの世の者ではないことを如実に物語っていた。

綾野の両頬を涙が伝う。

「全てはこの日のためだったのですか？」

額に乱れかかった髪をそつと整えてやりながら、愛しい人に問いかけた。

藤堂が自分のために玄斎に渡していた金のこと、藤堂の自分に対する思いも、そして自分を愛しく思っていたからこそ、自分との間に距離をおこうとしていたことも、本当は何もかも知っていた。

「でも、それでも綾野は、藤堂様を好きになってしまいました」

悲しい告白を口にした時、背後に人の気配がした。

いつからそこにいたのだろう。

黒装束姿の男が立っていた。

夜目にも老人とわかるその男は、いったん屯所に引き上げた後、再び七条油小路の見張りに狩り出されていた三浦常次郎だった。

「藤堂さんを殺したのは私です」

絞り出すような弱々しい声。

一日で十年も年老いたような三浦の姿を、綾野は悲しみに濡れた目で静かに見上げた。

「あなたは誰ですか？」

「三浦……常次郎と申します。藤堂さんが新選組にいらした頃、その部下だった者です」

「本当にあなたが……藤堂様を……」

目の前のいかにも気弱そうな老人が藤堂を殺したとは信じられない。

けれども三浦は何度もうなずいて、その場によろよるとひざまずいた。

「藤堂さんには本当にお世話になりました。私は自分の命が惜しくて恩人を殺してしまったのです。藤堂さんは若くて、強くて、優しく、そして、あなたのような方もいらっしゃったのに……こんなことなら、あの時、私が死ねばよかった」

周囲の闇の中には十数人の新選組隊士が潜んでいた。

いくつもの目がじっと見守る中、綾野は三浦を見つめ続けた。

真実を語っていることはわかるが、それでもやっぱり信じられない。藤堂を殺した相手が憎くないと言えば嘘になるが、藤堂を死に追いやったことを心底悔いて打ちひしがれている三浦の姿はあまりに哀れだった。

「私は誰も恨んではおりません」

綾野は三浦に向かって微笑んだ。

「ただ、ほんの少しだけ、藤堂様と二人きりにして頂けませんか？」

三浦は、屯所に戻ったままの永倉と原田に代わって現場の指揮を執っている島田魁の方を振り返った。

島田は無言でうなずいた。

島田もまた藤堂の死を悼む一人だった。

白い花のような雪が、ひらり、ひらりと降り始めた。

けれどもその雪に気付くこともなく、綾野は藤堂の傍らに座っていた。

「藤堂様、お忘れですか？綾野はおてんばですから、藤堂様がどこ

へ行っても、きつと追いついて、つかまえて差し上げます」
静かに語りかける声は、わずかに笑みを含んでいた。

「今度こそ、綾野を妻にして下さいね」
ささやくように告げてから、冷たい唇に優しく口付け、藤堂が差し
ている脇差しに、そつと白い手を伸ばした。

慶応四年の夏が足早に去っていく。

川上玄斎はぼんやりと縁側に座っていた。

庭の撫子は今年も美しい花を咲かせてくれたのに、どんなに耳を澄
ましても、菓子を手にひょっこり裏口から現れる青年の声も、それ
を迎える小さな足音も聞こえてはこなかった。

失われたものを心の中で追い求めるうちに、心に深く刻み込まれた
和歌がふと口について出た。

「撫子の……」

撫子の 咲くも見やらで 武士の
あけ朱に染まりて 散るぞ悲しき

それは玄斎の手の中にある、小さな手帳の末尾に書き付けられたも
のだった。

「藤堂君、武士道などというものは、私にはよくわからない。だ
が、この歌に込められた君の心情を思うとたまらないよ」

手帳に点々とついている茶色いしみをいたわるように撫でながら、
玄斎は小さなため息をついた。

鳥羽・伏見で幕府軍と薩長軍が真つ向から衝突し、世に言う「戊辰の役」が始まったのは、七条油小路の惨劇から一月半後の慶応四年正月三日のことだった。

慶応三年の十二月中旬に、新選組は伏見方面の警備を強化するために伏見奉行所に屯所を移したが、それからわずか二日後に局長の近藤は高台寺党の生き残りに狙撃されて深手を負った。

そのために、鳥羽・伏見の闘いでは、土方が指揮をとっている。

幕府軍一万、薩長軍三千。

数の上では圧倒的に優勢だったにも関わらず、幕府軍は総崩れとなって敗退した。

この戦い以後、薩長軍は自分たちのことを官軍と名乗るようになり、錦の御旗を押し立てて、幕府と幕府にくみする佐幕派諸藩を圧倒しながら進軍し始めた。

新選組二番組長、永倉新八と名乗る男が川上診療所を訪れたのは、新選組が伏見へ移動する前々日のことだった。

朱に染まりて3

「お渡しすべきかどうか迷いましたが、私が持っているよりは、供養になるかと思ひまして……」

男は懷から小さな包みを取り出し、藤堂平助の遺品だと言つて玄斎に手渡した。

「新選組の幹部であるあなたが、どうしてこのようなことを
我知らず冷ややかな口調になつていた。

本当は、藤堂を殺したのはあなた方ではないかと、思い切り罵声を浴びせてやりたかつた。

答える代わりに、永倉は無言で微笑んだ。

泣いているような、怒っているような、そして寂しげな男の微笑みに、玄斎は思はず息を飲み、見てはいけななものを見てしまったような気がして目を伏せた。

包みの中におさまつていたのは珊瑚の簪と小さな手帳だつた。

手帳には、藤堂らしい端正な文字で、異国の言葉などが記されていた。

一枚、一枚、丁寧に手帳をめくつていき、最後のページに書き付けられた歌にじつと見入つてから顔をあげた時、永倉の姿は消えていた。

「あのご仁は、その後、どうなされたか……」

涼しい夕風に吹かれながら、玄斎はぼつりとつぶやいた。

鳥羽伏見で敗戦した新選組は海路で江戸へ逃れ、軍を立て直した後
に「甲陽鎮撫隊」として出陣したが、またも破れて江戸へ舞い戻つ

ている。

隊士たちはちりぢりばらばらとなり、永倉と原田も新選組を離脱した。

傷が言えた近藤は、残ったわずかな隊士を率いて下総流山へと陣を移したが、そこで官軍に取り囲まれた。

他の隊士が逃亡する時間をかせぐため、土方の反対を押し切って自ら投降し、慶応四年四月に江戸の板橋宿で斬首された。

その首は三条河原に晒されたが、それからいくらしないうちに、忽然と消えている。

新選組一番隊組長だった沖田総司は、労咳で病み衰えた身体を引きずるようにして甲陽鎮撫隊に参加したものの、途中で立ち上がれなくなつて江戸へ引き返し、近藤の死のひと月後に千駄ヶ谷の潜伏先で短い生涯をひっそりと終えた。

沖田の死の半月前、原田左之助は幕府軍最後の残党集団となった彰義隊に入隊し、上野の戦闘で銃弾に倒れている。

隊士らが次々と脱落していく中、土方歳三はどこまでも闘い続けた。近藤が処刑された後は、残った隊士を率いて会津方面で闘い、会津藩が降伏した後は榎本艦隊と共に箱館はこだてへ渡った。

土方が死んだのは、翌年の五月十一日。

この日、官軍による箱館総攻撃が行われ、最後の最後まで抵抗した佐幕派の残党を掃討した。

この日、土方は、左手に馬の手綱を握り、右手には愛刀の和泉守兼定を高々と掲げ、たった一人で官軍に斬り込んだ。

一斉射撃による壮絶な最後であったというが、官軍がどんなに捜しても、死体は見つからなかった。

数え切れないほどの修羅場をくぐりぬけ、永倉はただ一人生き残った。

新選組を離脱した後、靖共隊を組織して会津・米沢を転戦し、敗走に敗走を重ねた上、気が付くと一人になっていた。

無我夢中で江戸に戻ったが、その頃の江戸は完全に官軍の支配下にあった。

完全に行き場を失った永倉は、半ばやけくそで松前藩江戸屋敷の門を叩いた。

脱藩以来、誰にも言わなかったが、永倉は松前藩の上士の子だった。従兄弟は松前藩の家老であり、永倉自身も将来を約束された身だったが、家格や藩に縛られることを嫌い、剣一本でどこまでやれるか試してみたくて、二十歳の時に脱藩した。

松前藩は永倉を受け入れ、官軍の追求をかわし、最後まで匿い通した。

皮肉と言えば、これほどの皮肉はない。

一度は捨てたはずの家格と藩に、永倉は命を救われた。

しかしこんな事が、神ならぬ玄斎にわかるはずもない。

「藤堂君、剣の時代はもう終わりだよ」

燃えるような夕焼けが西の空を染めている。

藤堂がいつもそうしていたように、下駄をつっかけて庭に出た。

この頃は、独り言がめつきり多くなった。

吐息と一緒に漏れ出た言葉に苦笑しながらも、玄斎はなおも言葉を

紡ぐ。

「今度生まれてくる時は武士としてじゃなく、一人の人間として……そう、例えばこんな美しい夕暮れ時には、こう、綾野の手を取ってね、川べりをのんびりと歩いてみてはどうだろう？ そんなに生き急ぐことはなかったんだ。君が残したあの歌、あれは確かにいい出来だがね。私は……好きではないな」

撫子の　咲くも見やらで　もののふの
朱に染まりて　散るぞ悲しき

それは動乱の中を懸命に生き、新しい時代を見ることなく散った、
一人の若者の魂の叫びだったのか。

堂々たる隊列を組んで洛中を闊歩していた新選組の姿を二度と見る
ことはない。

魁先生とあだ名され、新選組四天王の一人として勇名を轟かせた美
貌の隊士のことを覚えている者も、今ではほとんどいなくなっ
てしまった。

——ああ、もう、ここには誰もいない。

まぶしげに細められた玄斎の目から、光るものがしたたった。

——了——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3683c/>

朱に染まりて

2010年10月10日00時08分発行